

オープン・フォーラム 漢字文化の今 5

—— 漢字文化の継承と発展 ——

主催：京都大学 21 世紀 COE 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」

—— 漢字文化の全き継承と発展のために ——

京都新聞社

2008 年（平成 20 年）2 月 10 日（日）

京都新聞文化ホール

目 次

プログラム	3
講演者・司会者紹介	4
開会の辞（高田 時雄）	6
基調報告	
岡村 秀典「中国古代の漢字」	7
富谷 至 「木簡が語る漢字習得」	15
高田 時雄 「シルクロードと漢字文化」	21
井波 陵一「漢字と掛けてコカ・コーラと解く。そのココロは？」	28
パネル・ディスカッション	37
資料	57
あとがき	70

プログラム

オープン・フォーラム「漢字文化の今 5」

—— 漢字文化の継承と発展 ——

主催 京都大学 21 世紀 COE 「東アジア世界の人文情報学教育据点」

—— 漢字文化の全き継承と発展のために ——

京都新聞社

日時 2008 年（平成 20 年）2 月 10 日（日）13 時～17 時

場所 京都新聞文化ホール

総合司会：石川 禎浩（京都大学人文科学研究所 准教授）

開会の辞 高田 時雄（京都大学人文科学研究所 教授）

基調報告

岡村 秀典（京都大学人文科学研究所 教授）「中国古代の漢字」

富谷 至（同上）「木簡が語る漢字習得」

高田 時雄（同上）「シルクロードと漢字文化」

井波 陵一（同上）「漢字と掛けてコカ・コーラと解く。そのココロは？」

パネル・ディスカッション

司会：石川 禎浩

パネラー：岡村 秀典

富谷 至

高田 時雄

井波 陵一

講演者紹介

岡村 秀典（おかむら ひでのり） 京都大学人文科学研究所 教授

1957 年生まれ。専門研究領域は中国考古学。広大な中国の多様性に留意しながら、中国農耕社会の形成から古代都市への発展過程を社会考古学の方法論によってあつづけ、さらに、殷周・秦漢代の青銅器や玉器をはじめとする文物が東アジア世界でどのような意味をもっていたかを文化史的方法によって研究している。また、中国の考古学者との協力のもと、しばしば中国での発掘作業にもたずさわっている。近著に、『夏王朝 王権誕生の考古学』（講談社、2003 年）、『中国古代王権と祭祀』（学生社、2005 年）、『夏王朝 中国文明の原像』（講談社学術文庫、2007 年）など。

富谷 至（とみや いたる） 京都大学人文科学研究所 教授

1952 年生まれ。中国法制史の領域のうち、主として刑事法を研究対象としている。中国秦漢時代から隋唐にいたるまでの刑罰・裁判制度の変遷を明らかにする。漢代の法制史研究に欠かせない簡牘を読み解くだけでなく、書写材料、歴史考古資料としての簡牘学の研究も同時平行してすすめている。近著に、『韓非子——不信と打算の現実主義』（中央公論新社、2003 年）、『木簡・竹簡の語る中国古代——書記の文化史』（岩波書店、2003 年）、『教科書では読めない中国史：中国がよくわかる 50 の話』（小学館、2006 年）などがある。

高田 時雄（たかた ときお） 京都大学人文科学研究所 教授 本 COE 拠点リーダー

1949 年生まれ。専門分野は、敦煌写本の言語史的研究。チベット語、コータン語、ウイグル語、漢語などをはじめとする各種言語の宝庫である敦煌遺書を手がかりに、敦煌周辺で行われた言語、さらには中央アジア、東アジアの言語社会の具体相を解明する。近著に、『草創期の敦煌學』（知泉書館、2002 年） 『敦煌・民族・語言』（中国語、中華書局、2005 年）、『転型期的敦煌学』（中国語、共編著、上海古籍出版社、2007 年）などがある。

井波 陵一（いなみ りょういち） 京都大学人文科学研究所 教授

1953 年生まれ。専門分野は、清代の文化と社会、中国書誌学、および近現代中国における西洋学術思想の受容。中国文学の傑作である『紅樓夢』の創作背景のほか、近代中国を代表する学者である王国維の学術、および現代中国におけるベンヤミンの受容過程などを実証的に研究している。また、人文科学研究所附属漢字情報研究センターの主任として、中国書誌学にかんする広範な研究も行っている。近著に、『知の座標 中国目録学』（白帝社、2003 年）、『紅樓夢と王国維——二つの星をめぐって』（朋友書店、2007 年）などがある。

司会者紹介

石川 禎浩（いしかわ よしひろ） 京都大学人文科学研究所 准教授

1963 年生まれ。専門分野は中国近現代史、および近代日中文化交渉史。清末における中国での近代西洋文明の受容と明治日本の影響に関心を持つ。他方、中国の支配政党である中国共産党の歴史を、実証的に、かつ同時代の世界の動向と結びつけて研究している。主な著書に、『中国共産党成立史』（岩波書店、2001 年）、『初期コミンテルンと東アジア』（共編著、不二出版、2007 年）などがある。

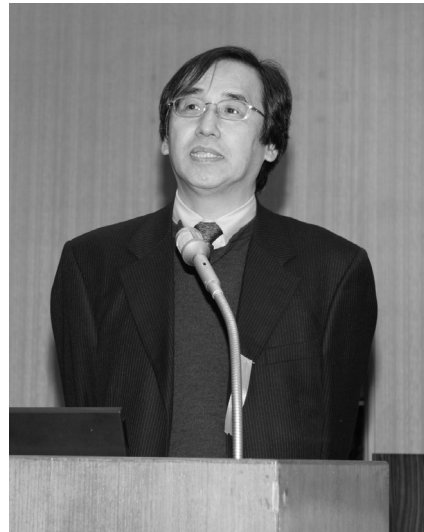
開会の辞

石川（司会） ただ今から京都大学 21 世紀 COE「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」、京都新聞社主催のオープン・フォーラム“漢字文化の今”第 5 回「漢字文化の継承と発展」を開催いたします。

本日は、昨日来の雪で足もとの悪い中、多数ご来場いただき、まことにありがとうございます。開会に先立ちまして、本 COE の拠点リーダーであります京都大学人文科学研究所教授の高田時雄からひと言ごあいさつ申し上げます。

高田 皆さん、こんにちは。ちょうど三連休のまん中で、いろいろご計画もありだったと思いますが、たくさんの方々にお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。

オープン・フォーラム「漢字文化の今」も今回で 5 回目になります。毎年いろいろなテーマを設定してやってきましたが、今回は初心に立ち返り、「漢字文化の継承と発展」という課題で、講演とパネル・ディスカッションを開催することになっております。初心に返ると申しましたが、この「漢字文化の継承と発展」は、私どものプログラムの副題として当初からつけられているもので、我が国の漢字文化をできる限り全面的に継承し発展させたいという、我々の念願が込められたものです。そして初心に立ち返るために、今回の報告者は、すべて私どものスタッフが担当しております。日ごろの研究の一端を皆様方にお聞きいただき、それに基づいて議論を深めさせていただければと考えております。



実は、去年の暮れに同じような趣旨で国際学術シンポジウムを行いました。今回はその成果の一端を一般の方々にもお聞きいただいて、漢字文化にかかわる知見が、今日はこの程度まで達しているということをご理解いただければと大変幸いだと考えております。

時間もございませんので、早速講演に入らせていただきます。講演が四つ済みしたら、あとはパネル・ディスカッションということで、きょうは午後 5 時までおつき合いただきます。どうかよろしく願いいたします。

（拍 手）

石川 それでは、本日の予定を大まかにお伝えしておきます。本日はまず人文科学研究所の 4 人の教授が、四つの講演を行います。お一人 30 分ほどの講演時間を予定し

ておりますので、それをこれから 2 時間ほどお聞きいただきます。そして、3 時から 15 分ほどの休憩をはさみまして、引き続きパネル・ディスカッションに移る予定です。午後 5 時まで長時間にわたりますが、どうかよろしくおつき合いのほどお願い申し上げます。

申し遅れましたが、私は、本日の司会を担当いたします京都大学人文科学研究所准教授の石川と申します。

それでは、早速ですが、本日の一つ目の講演、人文科学研究所の岡村秀典さんに「中国古代の漢字」の講演をしていただきます。岡村先生は、人文科学研究所の中でも、主に中国の考古学を研究しておいでです。それでは、岡村先生、よろしくお願いします。



基調報告 1 「中国古代の漢字」 岡村秀典（京都大学人文科学研究所教授）

ただいま紹介いただきました岡村です。きょうは「中国古代の漢字」というテーマでお話しさせていただきます。

中国の古代文明は、いわゆる世界の四大文明の一つとされています。殷代に甲骨文字が出現しますが、それが漢字の起源とされています。その漢字は、甲骨文字から今日まで、すでに 3300 年という非常に長い時間にわたって用いられ続けてきました。

中国以外のメソポタミア文明、エジプト文明、そしてインダス文明で用いられていた文字は、古代文明とともに滅びてしまいました。ただ、中国の漢字だけは、3000 年以上にわたって使い続けてられてきたわけです。それは魏晉南北朝の時代に北方民族が中国に侵入してきても滅びることはなかったし、モンゴルが中国に大挙して入ってきても滅びることはありませんでした。モンゴルの元も満州族の清も独自の文字を持っていたけれども、漢字はずっと今日にいたるまで継承されてきたわけです。その理由はいったいなぜなのか、少し考えてみたいと思います。

まず、殷周時代に漢字が始まったわけですが、漢字研究にたいへん大きな足跡を残された白川静先生に、『漢字』というタイトルの岩波新書がございます。その中に、「原始の文字は、神のことばであり、神とともにあることばを、形態化し、現在化するために生まれたのである」と書かれています。少しカタカナを交えて申し上げるならば、文字というのは、人と神とのコミュニケーションの手段であると言い替えることができるかと思います。

しかしながら、それだけではないということを、きょうは少し申し上げてみたいと思います。それが漢字が 3000 年あまりの長きにわたって継承されてきた重要な理由の一つであろうと考えるからです。結論から申し上げるならば、漢字というのは、階

級的に庶民にまで広がったということが一つ。それから空間的に東アジア全域に広がったというのがもう一つ。その二つの理由によって、漢字が非常に長く今日まで使われてきたと考えています。ですから、殷周時代に、たしかに文字は人と神とのコミュニケーションの手段として用いられ始めたわけですが、それだけではないということを、きょうは少し取り上げてみたいと思います。



きょうのお話しの中心となる時代は、殷周時代に続く秦漢時代です。この時代には官僚制度がたいへん発達します。その中で、次に富谷さんがお話しになる簡牘（木簡）であるとか、あるいは石に刻まれた文字などが出現するということは、よく知られております。秦漢時代には、そういった為政者が用いる文字のほかに、庶民にも文字が広がっていました。少なくとも庶民のいろいろな気持ち、考え方を反映するような文字が広まったということを、少しみていきたいと思います。

そして、漢から魏晋南北朝代になりますと、東アジア全域に文字が広がりました。朝鮮半島にあった高句麗、百済、新羅という三国と、日本列島の倭にも文字が広がっていったということを、駆け足でみていきたいと思います。

まず、甲骨文字以前の例を一つだけ挙げておきます。資料3（資料については、本報告書 p.58～62 参照）は山東省の丁公遺跡から出土した土器ですが、その表面にかわった形の文字が刻まれていました。甲骨文字が出現する以前、いろんな地域でいろんな文字がつくられていました。これはその一つで、拡大図の左側に挙げたのは甲骨文字です。東京大学の松丸道雄先生が、甲骨文字とよく似た文字だと指摘されていますが、残念ながらこれを文章として読むことはできません。少なくとも漢字、甲骨文字の原形ではないと結論づけることができます。

さらに不思議なのは、これが洗面器のようなお盆の底部に刻まれていることです。中をのぞかないと見えないようなところに刻んでいることも、考古学の立場からすると、いささか不思議なことです。

しかも、これは日常生活に用いる、灰陶という土器で、祭祀や儀礼に用いる黒陶ではありません。この段階では、仮にこれが文字であったとしても、支配者がそれを独占していたわけではないということも、たしかなようです。

その後、1000 年ほどたって出現したのが、殷代の甲骨文字です（資料 4）。すでに指摘されているように、甲骨文字というのは 9 割以上が祭祀、つまりお祭りに関係の

ある内容です。しかし、それと同時に、行政上の用途に用いられることがありました。きょうはその点を少し強調して取り上げてみたいと思います。甲骨文字の中に行政的な文書があったということですね。それから青銅器の銘文である金文、あるいは玉や石に文字を刻んだもの、あるいは朱筆で文字を書いたものがあり、それらにも行政的な内容の記述があります。ですから、神権政治がおこなわれた殷代には、祭祀にかかわる文字が多く用いられたと考えられていますが、それだけではなく、実は多様な用途に文字が使われたということを、少し紹介してみたいと思います。

まず、甲骨文字の中に、甲橋・骨臼刻辞というものがあります。資料5の左側の拓本は、亀の甲羅の腹の部分です。亀の甲羅というのは上と下とが合体し、中が空洞になっています。甲骨文字が刻まれているのは、おなかの平らな部分ですが、それとふたの甲羅とをつなげる部分、耳のように突出したところを甲橋と呼んでおります。この例の場合は、そこに「帚好入五十」と書いてあります。帚好という有力な豪族が、殷の王に50個の亀の甲羅を差し出したという記録です。

帚好は、武丁という殷王の妃と言われておりますが、その帚好を出した有力な豪族であった帚好族が、50個の亀の甲羅を入れたという記録をここに書いているわけです。このように数の管理ということが、甲骨文字が出現した段階から王朝にとって重要であったわけです。きょうは、そうした経済的なやりとりの記録が甲骨文字の出現段階にみられたということを強調しておきたいと思います。

そしてまた、「五十」と漢字で表す方法が、今日の私どもの漢字と同じであることも重要なポイントです。

少し脱線しますが、殷周時代では、数は万の単位まで数えられていました。今日と同じように殷周時代でも「一万」と漢字で書いていましたが、英語では十と千、つまり *ten thousand* と書かないといけません。一万という簡単に書ける言葉でも、英語で表わすと、*ten thousand*、2万であれば *twenty thousand* と、かなりややこしい、スペルがすぐには思い出せないような表記法をとらないといけません。

数字という点では、漢字は大変よくできた言葉です。ひと昔前の日本で、「読み書きそろばん」という言葉がありました。読み書き、漢字の学習ですね。それからそろばん、算数が大変重要であったわけです。中国でも、漢字の学習と、代数学といいますか算数が大変重んじられていました。中国人が商売上手であるのは、このことと関係があります。その読み書きそろばんにおいて、漢字が重要な役割を果たしてきました。それもまた漢字が3000年の長きにわたって用いられてきた理由の一つではないかと考えています。

その読み書きの練習をしたのが、資料5の右側の「習契肋骨」です。普通、甲骨を用いた占いでは、牛の肩甲骨の平らなところを用い、肋骨という細くて分厚い部分は捨てていました。そういう捨ててしまう骨に手習いの文字を刻んで、漢字を練習したわけです。

先ほど出てきた婦好という武丁の妃の墓が、殷墟で見つっております。殷墟婦好墓というお墓ですが、その玉でつくった戈の基部のところに、資料6の下は拓本ですが、「廬方皆入戈五」という文字が刻まれていました。これも廬方という豪族が玉戈5本を王朝に差し出したという記録です。殷王朝における支配と従属の関係の中で、貢納を管理するための文字が器物に刻まれることが行われていたわけです。

お手元の資料では、次のページになりますが、資料7が同じ殷墟婦好墓の石の楽器である磬に刻まれた文字です。これは妊冉という豪族が石の磬を貢納したという銘文が刻まれていました。このように行政的な用途にも文字が使われていたわけです。

資料8は殷墟婦好墓の隣にある小屯18号墓で発見された玉戈です。その玉戈に朱で文字が書いてありました。2行目の上の文字は「執」ですね。左側のへんはちょうど手かせを漢字で表した形で、右側がムチを持つ手を表した形です。これは甲骨文字と同じ字形ですが、筆で書かれていました。

ほかに殷墟では人の頭の骨に戦勝を刻んだ事例もありますので、打ち破った相手の酋長の頭蓋骨に戦勝を記念する銘文なんかも書くことが行われていたわけです。つまり、文字は出現の段階から多様な用途に使われていたのです。

西安より西に車でおよそ3時間ほど行ったところに周原という、周王朝の発祥地があります。その周原遺跡でも資料9のような殷の終わりごろに使った甲骨文字が発見されています。殷の末期になると、殷の王様だけではなく、辺境にいた周人の間にも文字が広がっていたのです。

その近くで、最近、周公廟遺跡が発見されました。これは周公一族の領地であろうと、私は考えております。資料10は甲骨の裏表を左右に貼りつけたのですが、表の左端の部分に大きく「周公」という文字が刻まれています。

周の王様は、資料9にみたように、かなり長い文章を書いているのですが、それより少し下のランクの貴族の場合は、ごく短い文章だけを簡略に書いていました。

資料11は今の北京市の郊外にある琉璃河遺跡から出土した例です。亀の甲羅に「成周」という2文字だけが刻まれていました。成周というのは洛陽にあった周の都ですが、それだけでは何を意味するのかよくわかりません。地方でもこのようにごく簡単な単語や短い文章だけを刻んでいるのです。ですから、都の周辺地域や北京という辺境地域でも、漢字は使われていたけれども、そんなに長い文章は用いられていなかったし、文章としては発達していなかったのです。

ところが、次の春秋時代になると、長い文章の文書を扱う人が、いろんなところに出現します。資料12は孔子の時代の遺跡ですが、「侯馬盟書」と呼ばれているものです。先のとがった玉の板に朱で文字を書いています。これは下克上の時代、日本の戦国時代みたいな下の身分の人が上の身分の人を倒して、反乱を起こすというような世相の時代です。紀元前490年代、山西省にあった晋国で大きな内乱が起きました。その中で、味方をとにかく増やすため一般の庶民を巻き込んで、味方になるように盟約

させました。

そのときに、穴を掘って、牛を生贄にして、犠牲の牛とともに盟約の文書を書いた玉の板を穴に埋め、そして神のもとに送るという儀式が行われたのです。一種の契約文書を保存せずに穴に埋めてしまって、それを神様のもとに送り届けたわけです。

こういった盟約の儀式そのものは、今日に伝っておりませんが、例えば日本で神前で結婚式を挙げるときに、新郎と新婦は神前で誓いの言葉、誓紙を読み上げます。これなんかも、こういう盟の伝統を継承するものですし、神前の結婚式のときに三三九度というようにお酒を飲みますけれども、こうした三度お酒を飲む風習も、日本の固有の文化だと思っている人が多いと思いますが、決してそうではなくて、中国の古代に盟約を行うときに三回さかずきを傾けることが、礼書の中に書いてありますので、中国の古い伝統が日本の神式の儀式の中にもぐり込んで、今日まで残存するようになったということです。中国の古代を理解すれば、日本の伝統的な風習もかなり理解が深まると思います。

駆け足で次の秦漢時代を見ていきます。この時代には官僚制度が発達し、そうした行政上の文字が普及します。それとともに文字が庶民の間にも広がっていきました。そして後漢時代になると、マーケットに向けた商売上の宣伝文句が出てくるということを見ていきたいと思います。

官僚制度が非常に発達した結果、資料 14 は漆器の「耳杯」というお酒を飲む器です。そこに、つくった年号と、どこの工房でつくったのかということ、その器の名前と容量、工人の名前、そしてそれを監督した役人の名前が、こういう非常に細かい漢字で事細かく刻まれています。このように、漆器をつくった責任者の名前をきちんと書くことによって品質を管理しようという、今日の我々の社会とあまり変わらないようなことが、前漢時代に始まっていました。問題があれば、どこに責任があるのかということがすぐわかるようにきちんと書いてある。そういう社会が秦漢時代にもうできていたわけであります。

資料 15 は「鐘（カン）」と呼んでいる器に刻まれたものですが、長安の都の近くにある上林宮というところで、紀元前の 24 年から紀元前の 18 年までの 7 年間に合計 1258 の鐘がつくられたということが、この銘文からわかります。

この拓本ですと、周博という人がつくったんだと。上林銅鑒容積が 50 石であると。重さか 125 斤で、陽朔 4 年（BC21 年）の 5 月に工人の周博がつくったと。240 個つくったうちの 82 番目であるというように、つくった責任者の名前もきちんと書いてあるわけです。

あるいはそれを買った人も銘文として書いておりまして、資料 16 は中山国の郎中であった定という人が、紀元前の 121 年の 4 月に山西省の市場でこの銅けんという器を購入したということが書いてありまして、責任の所在が明確にわかるようになっているわけです。

その一方、文字というのは蛇の絡まったような文様で表されていると、ちょっとしゃれたような感じの使い方も行われております（資料 17）。

資料 18 はサイコロですね。今の我々が使っているサイコロは六面体ですが、これは多面体のこういう銅のサイコロで、銭の形をした「酒令銭」と呼んでいるものを使って双六をして遊んだものです。そういうものにも、例えば「楽無憂」とか、「飲酒歌」であるとか、ちょっとおもしろいのは、「奥さんが怖いのはなさけねえや（畏妻鄙）」とか、双六をしながらお酒を飲んだり、いろいろ他愛もない話をする。そういう娯楽用の漢字の使われ方もするようになりました。



武帝の時代には、こういう鏡（資料 19）にも「日有熹 宜酒食」というような吉祥句の鏡が用いられるんですけども、同時に「君有行、妾有憂 行有日、返無期 願君強飯多勉之 仰天大息長相思」（資料 20）——夫が兵隊として出征していく。妻である私はそれが大変悲しいんだと。出征していく日取りは決まっているんだけど、いつ帰ってくるのかわからない。願わくばたくさんご飯を食べて頑張ってくださいというような銘文、庶民の出征兵士を送る妻の悲しみを歌う叙情詩が、鏡の銘文に現れてくるわけです。日本の演歌に近い、憂いを帯びたような歌が庶民の間で広がっていたことがわかります。

資料 21 は『詩経』の「君子役に干く、其の期を知らず」——帰ってくる時期はわからない。「君子役に干く、これを之を如何か思うこと勿ん。君子役に干く、苟も飢渴することなかれ」というような銘文を継承するものであって、後漢の終わりの古詩十九首にある「行き行きて、重ね行き行く、君と生きながらにして別離す（行行重行行、興君生別離）」と。最後に、努力して賓飯を加えよと、ご飯をたくさん食べなさいよというせめてもの激励の言葉で結ぶというあり方が、『詩経』の時代から鏡の前漢の時代、そして後漢の終わりまで、庶民の間で歌い継がれてきたことがわかるわけです。

資料 22 は後漢時代に民間に流通した酒のつぼですが、江陵の黄陽君という人がつくった器であります。これを買った人は、役人であれば二千石の高位高官に至るし、商売人であれば、二千万円の大金が転がり込んでくると。農家であれば、大変大きな家を得られるんだという吉祥的な文言が書かれている。一般に広がる青銅器にも、こういう銘文が出てくるようになるわけです。

3 世紀に入っているんですけども、大きさを書いた鏡があります（資料 23）。その大きさは、この 2 面の鏡ではほぼ寸法どおりにつくられているわけです。資料 24 は天理参考館にある鏡で、最近、私が調査して、これまで読めていなかった文字が読めたものですから、紹介しておきますと、將軍の孫怡の部下であった張平という人の鏡で、

7 寸の大きさがあると。1 尺を 23.7 センチすると、7 寸は 16.6 センチであります。ところが、この鏡の実際の大きさは 13.4 センチと、ずいぶん小さい。1 寸あまりサバを読んでいる。持ち主は後で刻むんですが、その刻んだ文字というのは、どうもサバを読んだ数字になっている。

これは大変おもしろい鏡だということは、この孫怡という將軍は、赤烏 2 年（239 年）に、遼東の公孫氏を救援するために派遣された呉の將軍であります。この 239 年、北の魏の国では景初 3 年にあたるわけですがけれども、邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送った、その年のものです。この鏡にも、倭と呼ばれた日本列島と中国との間のさまざまな駆け引きが反映されているということで、大変興味深く思うんですが、きょうは時間の関係で、そういう時代のものであるというぐらいにとどめておきたいと思います。

その後漢の終わりから三国の時代には、こういうふうな「呪符」と言っている、漢字をいくつか組み合わせたような呪術的な漢字も生まれております（資料 25）。

漢字が東アジア全域に広がったということを急いで見ていきたいと思います。南のほう、ベトナムのあたりまで勢力を広げていた南越国という国がありました。その南越王のお墓が広東の広州で見つかりましたが、そこのお墓の中には大変たくさんの文字を書いたこういう刻書の土器、あるいは金のはんこ、「文帝行璽」と刻まれています（資料 27）。あるいは封泥であるとか、あるいは青銅器というものに文字が大変広く用いられておりました。

一方、朝鮮半島、日本列島はと言うと、平壤のあたりではこういう硯箱（資料 28）が出ております。楽浪郡という漢の出先機関が設置されておりましたので、文字は一般に役人が普通に使っていた。

それと同じような文物が韓国の慶州の近く、茶戸里というところで見つっております。これは筆でありますし、これは鉄の刀であります。いわゆる刀筆の吏が用いる副葬品をお墓に入れていたということがわかります。

そのころの日本列島はと言うと、文字を入れた鏡が入ってきているんですが、文字を使っていた証拠は今のところ見つかっておりません。ただ、興味深いのは、日本列島にはじめて鏡が入ってきたとき、紀元前の 1 世紀ですが、それと同じ時期の同じような鏡が、西のアフガニスタンのティリア・テベというところからも出ている（資料 29）。中国でつくった鏡が、東は日本列島、西はアフガニスタンにまで広く広がっていたと。その両地域においては、多分その文字を読んでいなかったとは思いますが、文字を刻んだ分布というのが、広くユーラシア大陸に広がっていったわけです。

最後ですね。資料 30 は 3 世紀に韓国の百済でつくられた七支刀であります。刀身の泰和 4 年は 369 年にあたります。この表に書かれた銘文、「陽」と「丙」と「王」という三文字は韻を踏んでおります。押韻しているということでもあります。その後の文字が読めないんですが、一般にこれまで「だれそれ作」と読まれておりました。とこ

ろが、東洋史の宮崎市定さんは、これは作者の名前を刻んだものではなくて、吉祥の「祥」ではないかと指摘されました。それを押韻の凹面で検証してみると、たしかに「祥」のほうがふさわしい。「陽」、「丙」、「王」、「祥」が陽部という韻で押韻するんだと考えたほうが好ましいということで、日本の研究者と宮崎市定さんの説のどちらを取るかと言うと、私は宮崎説のほうがふさわしいと考えております。

それはともかくとして、3 世紀の段階では、そういう金石文の書式になった鉄の刀の銘文が用いられていたんですが、次の 5 世紀、埼玉の稲荷山古墳から出土した鉄剣のように、日本で独自に漢字を使うようになると、押韻の原則が崩れていくわけがあります。そして「ワカタケル大王が磯城宮にいた」というふうには、日本の固有名詞を漢字の音を用いて表すことが日本で始まるんですが、そういう時代になると、本来の中国における文字の使い方とは少し違った使い方になるのだということになります。

最初に結論を申し上げておきましたので、あらためて申し上げません。時間の関係で、これで終了させていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

(拍 手)

石川 岡村さん、どうもありがとうございました。中国で紀元前に生まれた漢字が、最初は荷札、それから占いやお祭りに使われ、そして最後に日本に伝播してきたということで、漢字の原初の姿を紹介していただきまして、本当にありがとうございました。

パネル・ディスカッションの進行の都合もございますので、講演にたいして質問等のおありの方は、受付のほうに質問票を用意してございますので、休憩時間に質問事項を記入していただき、お出しいただきたいと思います。パネル・ディスカッションのときに時間の許す限り質問をお受けして、講演された先生方にお答えいただきたいと思いますと考えております。

引き続きまして 2 つ目の報告、富谷至教授に「木簡が語る漢字習得」についてお話しをいただきます。富谷教授は、中国の古代法制史の研究の専門家で、また、中国で出土しました木簡、つまり木に書いたさまざまな公文書の研究もしていっぱいいます。

それでは、富谷先生、よろしくお願いします。

基調報告 2 「木簡が語る漢字習得」 富谷至（京都大学人文科学研究所教授）

富谷です。よろしくお願いいたします。先ほど岡村先生にすでに 10 分差し上げましたので、私はあと 20 分の持ち時間です。大急ぎで飛ばしていくことにいたします。

お手元に 2 枚、大きな A3 のものは、裏表なんですけれども、図を用意いたしました。そして A4 の半分のもの（本報告書には収録していません）は、今から私がお話ししていく順番であります。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅳ、Ⅳと続いてしまいましたが、これは間違いで、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵです。大体これを 5 分で飛ばしていきますので、よろしくお願いいたします。



ところで、先ほど岡村先生のお話の中で、文字というものの、そして文字が神と人間とのコミュニケーションであったと。しかしながら、それだけではなかったのだよという趣旨でお話いただきました。たしかに甲骨、また、金文の中身は、何も神だけではなしに、その対象として人間というものが出てきているのですけれども、しかし、いまから私がお話しするのは、神は一切存在いたしません。人間そのものであり、大変現実的な文字の使用と、そして書写材料の使用ということで、まず頭を切り換えていただきたいと思います。

時代は今から 2000 年ほど前の漢の時代になります。中央集権国家体制、皇帝が出てまいりまして、その皇帝が大きな帝国を維持し、そしてそれを運営する。「漢帝国」と一般的に言われているものです。

この漢帝国が、いわゆる帝国の中で秩序を維持して、そして皇帝の命令を末端まで浸透させ、また、臣下から、乃至は地方からその報告を皇帝に上げてくる。これはすべて文書で行われました。今、写しているのは帳簿ですけれども、報告する帳簿の一つです。また、お手元にお配りいたしました図のほうの 1 枚、大きな紙の 1 枚をご覧ください（本報告書 p.63～64 参照）。上に木簡の番号で、1, 2, 3, 4, 5, 7, 8 と書いてある 1 と 2 をご覧ください。例えば 2 は、内容としましては、「最近、にせ金づくりや、墓をあばいて副葬品を市場で売っている輩がいる。これを取り締まれ。そして報告せよ。各管轄の中でそういったことが起こっているか起こっていないかのことを、何月何日までに報告せよ」という内容を持った文面です。

そして「これを申し上げます、報告します」というのが、木簡の 1 です。ただし、正確に言いますと、これは報告書の写しです。コピーを取る。つまり役所では、報告

書を上の機関に報告して、そして自分のところではコピーを持っておく。なぜならば後できちんと報告したどうか、乃至はその報告がうそでなかったのかという、今度は逆に調査が入りますので、したがって、その写しを取っておかなければならないのです。

これは今の役所でもそういったことをしており、必ず役所ではコピーを取って、そしてその報告を出す。また報告を受けたところでも、コピーを取っておきます。その往復を我々は「文書行政」と言っているのですが、役所から上部機関への報告、そして上部機関から各下部機関への、下の者に対する命令、そして命令が果たして守られているかどうかということに対する報告。そういったもののやりとりでもって政治を行っていく。これが文書政治と言われているやり方であり、かつまた中央集権国家体制。皇帝の命令がどこまで徹底して行われたのかを知るものです。

よく考えてみますと、今でも役所ではそういうことをやっているわけなのです。そしてはっきり言いますと、そのやり方、つまり文書の徹底した行政が乱れてきたときに、例えば報告書をちゃんとつくっていなかったとか、ちゃんとコピーを保管していなかったとか、すべき文書を上に上げていなかったとか、そういったことがいわばゆるんでくる、弛緩してくる、いいかげんになってくるということは、その帝国の力がおとろえてくるということになります。考えてみてもそうではありませんか。皇帝の命令が最末端のところまで行かないことになってきますと、結局、その国力が弱ってきていることでもあり、報告の義務がちゃんとなされないということは、それだけ国力が、その国家が劣ってくるということになりますね。

年金記録がいいかげんな形で保管され、ないしはいいかげんになってくるということとは、その国が少しというか、だいぶ力がなくなってきた、行政能力がなくなってきたということでしょう。昔も今も同じだと思います。

しかしながら、漢帝国は一時期、非常に徹底した形で行っていました。これは甘肅省、今のシルクロードの入り口、出口といえますか、そこから見つかったものですが、首都長安から相当の距離があります。こういった末端まで徹底して行われたかどうかということは、実際には行われてきていたのですけれども、漢帝国が一時期いかに強力な帝国であったのかということを、大変明確に示しているものだと思います。

私はそれを人間の体で血管と血液に例えているのですけれども、文書の伝達のシステムが、通信システムないしは配達システムで、それが血管と例えられるならば、その中を流れるもの、血液が文書であります。そして血液が血管を正常に流れて動脈硬化を起こさないということは、その体が非常に強力な健康体であるということであり、それにどこかが、血管にしろ、血液にしろ、異常が起こってくると、つまり人間の体がだめになっていくのであり、国家に例えていうのならば、国家が衰退していくものだ、あるところで論じたことがあります。これが文書行政です。

ところで、この文書行政は、言うまでもなく文字で文書を書いて、伝達して、それ

を読んでいかなければなりません。つまり行政の必須の条件は、それを書き、そして読む能力であるのです。

多くの場合、錯覚されているのではないのでしょうか？すべての人間がこの文字を読めたのかと。先ほどの岡村先生のお話に決して異を唱えるわけではないのですが、すべての人間がああ鏡の文字を読めたのかと。今の我々にも読めないものを読めたとすれば、中国の古代のその当時の人間は、よほど識字能力が高かったのかということになってきます。よく考えてみると、果たしてすべての人間が読めたのでしょうか。全ても人間が文字を読めるという前提で書かれていたのでしょうか。もちろん書き手は文字を書くことができ、そして読むことができる人間ですけれども、すべての人間がああ文字を書いたのかということとは、おそらく話が別だと我々は考えなければなりません。そのことはちょっと置いておきます。

ところで、1番のものにしろ、2番のものにしろ、これは報告書であり、報告書の写しですが、この写しは、当時、書記官、「史」という身分の役人が書いておりました。問題は、こういった文書をだれが書くのかということと、この文書は役所の中でどのレベル、どの部署、ないしはどの機関まで伝達されるのか。つまり文書が最末端はどこまで行くのかということ。それは文書がどこまで読めるのかという問題につながってまいります。これを知るとは、大変ややこしい手続きがあり、私もまだ研究中でありまして、いつかこのことをはっきりさせたいと思っております。

それはさておきまして、どの段階まで文字が伝達されるのか。文書伝達の最末端機関はどこなのかということですね。それは役人の中でどのランクの役人までが文字を読めたのかという問題につながってきます。結論を言いますと、実はすべての役人が文字が読めたわけではありません。役人の中にも文官がおり、そして武官がいるのですが、少なくとも文字が読めた役人はすべてではない。武官クラスの役人が果たして文字が読めたのかということは、少し疑問に思わなければなりません。

問題はその次ですが、役人はどうしてその文字を勉強したのかということです。そのことに関してお話ししていきたいと思えます。

最近見つかりました木簡の中に、役人が文字を勉強するというか、文字を読める役人を選抜する、いわば試験の制度が書かれた竹簡が見つっております。これは当時の法律で、試験制度はこういうふうにするのだということですけれども、大体 5000 字を書けること。読めること。暗誦できること。さらにはその 5000 字の中のいくつかを、それがどれぐらいの割合かというのはよくわからないのですけれども、別の何種類かの書体で書けることという条件があって、その条件を満たした人間に、文字を書ける者として文字を書く資格を与えるという、試験規定といいますか、選抜規定が見つっております。

もう 1 度言います。文字を認識して読めること、それから別の書体を習得していること、そして文字が発音できること、この 3 つの事柄が試験として課せられるわけで

す。では、どうして書体を、また、どうして発音を試験に課したのかということにもなってまいります。

お配りいたしました 1 枚目の図の中の 3、4、5、6 という木簡をご覧ください（本報告書 p.63～64 参照）。これは文字を練習している、「習書簡」といっているのですが、例えば 3 番は「富貴昌宜」うんぬんという言葉が並んでいますが、別に鏡の吉祥句でも何でもありません。これは里というか村落の名前で、それを練習しているわけです。4 番目は、「えんによろ」という部首の練習している。5 番目は、言うまでもなく「以」という字を練習している簡です。6 番目は、ちょっと黒くなっているのですが、「傳舎」と「以」という字。そして「以」の下は郵便の「郵」、それから「行」という字ですけれども、これを練習しているところです。同じ字がずっと続いております。



実は、6 番目の簡は、「以」、「郵」、「行」という 3 字の組み合わせで、文書伝達の封筒の役割をしている木簡の上に、木簡の検面に伝達手段を書いたものです。郵便に配達せよと、大きくこれを書かなければならないのです。

ところで、例えば 5 番は「以」という字の練習ですけれども、これは「以」という字がわからないから練習しているのかと言うと、おそらくそうではないでしょう。いくらなんでもこの「以」という字はすぐ覚えられる字です。たしかに「富貴」という字、そして「昌宜候」は覚えなければならぬ。つまり識字の練習かもしれませんが、少なくとも 5 番のものは、字を知るためのものではなく、ほかの用途、乃至は、ほかの練習の目的があったと考えなければならぬ。いくつかの可能性がります。つまり筆慣らしかもしれない。また「以」の字をうまく書こうとしたものかもしれない。これはいくつかの可能性があって、まだ絞りきれないのですが。また 6 番は、先ほど言いましたように、ちょうど封筒に当たる部分の上に、大きくはっきりとわかりやすく強調して書かなければならない。「郵」、「行」というものは。そしてその「以」という文字は、2 番目の簡を見てください。はじめに建武六年の「年」という字が長く尾をひいています。これは、懸針という言葉であらわしている書き方なんです。

その次の「以上申し上げます」というちょっと下に、「言」という字、おわかりでしょうか。その「言」という字の下に「之」という字が書かれております。「之」という字を太く強調して書かれております。これは隷書体という書体ですが、隷書体の中には、特に公文書の中には、ある字に限ってこういった強く書いている部分がある。

これがどういう意味を持っているのかということは、これもいくつかの可能性がらるのですが、しかしながら、皇帝の命令の「令」という字だとか、それから「年」だ

とか、「あえて申し上げます」、「以上報告いたします」だとか、つまりその内容で強調したいこと、締めのところには独特の筆遣いをしている場合が目につきます。そこに文書の内容を強調する用途が生まれていたのではないかと、私は想像しているのですが。これが練習の一つの目的であったのかもしれませんが。

また、書体に関しまして、ほとんどが隷書体ですが、皇帝の命令書の中には、篆書体で書かなければならないものがありました。篆書というのは、我々がよく見る公印の書体でもあるのですが、そういった篆書体で書かなければならない皇帝の命令書があります。この皇帝の命令書を写したり、読んだりするためには、ほかの書体を習得する必要がでてくるのです。

書体によってその文書の内容、重みも変わってきているのですが、そういったことが、役人が習得しなければならない、勉強しなければならない内容でもあったわけです。

先ほど三つのことを言いました。識字力、書体の問題、もう一つは発音、声を出してということ。この点が、文書が最末端どこまで行くのかということにかかってくるのですが、おそらく最終段階においては、「村」を意味する何々里という「里」がありますが、その里まで文書が配達されて、そしてその後、立て札を読むように、役人は、さらにその下の文字の読めない人間に対して、その文書を読んで聞かせるということが行われたに違いない。そのためには漢字を読めるだけではなく、漢字を発音し、また、読みあげなければならない。ここにもう一つの 5000 字を暗誦する、声を出して読むことができるという試験の大きな目的があったのではないかと想像しているわけです。

そういった意味で、漢の社会は文字を利用して文書を作成し、その文書を利用して、その文書の中にいろんな形の機能を込めて、支配、行政を行っていったということが、この木簡の中で非常に明確にわかってまいります。

大きな A3 の No.2 と書いた参考資料をご覧ください（本報告書 p.65 参照）。これは『急就篇』と言われている、漢代の役人が使った識字習得の参考書です。識字用の参考書は木簡でも出てまいりまして、8 番の木簡は、『急就篇』が書かれた木簡です。

こういった『急就書』は、役人が学ばなければならない字であり、また、おそらく声を出して読みもしなければならないものだと考えられるのですが、見てください。特に下の欄、我々もどう読むのかわからないものがあります。私もこれをすべて読んでみろと言われると、なかなかむずかしい。

例えば、一番右の下の方の大きく 1 行で書いてある 2 行目をご覧ください。「鬼」という字が書いてありますね。そして「薪」という字が書いてあって、「白」という字が書いてあって、「粲」という字、そして金偏に甘いという字が書いてある。これはどういう意味だろうと言え、これは刑罰の名前です。当時科せられていた労働刑の名前。鬼薪（キシン）という労働。おかしい名前ですが、それは刑罰の名称であることは確

かです。

当時の役人にとっては、刑罰名称は絶対覚えなければならない文字であった。なぜならば鬼薪刑の者が何人おるか報告せよとか、囚徒がどれだけいるのか報告せよとか、さらには裁判関係の文書の中でも、この言葉は頻度が大変高い文字です。そういった文字を勉強しなければならない。これがその当時の役人の識字、覚えなければならない、書かなければならない文字であったわけなのです。

六朝時代になりますと、こういった識字の教科書の代表的なものは、書道でも有名な『千字文』というものが出てきます。文字を学習するときには『千字文』を使っただと言われてきたわけですから。これは梁の時代、6世紀前後の時代になってつくられたものです。左側のところにも掲げておきました（本報告書 p.66 参照）ように、「天地玄黄」からずっと四字句の韻文で続いた千字のもので、この内容は、格調の高い、思弁的で哲学的な内容が含まれていることは、ご存じの方も多いと思います。

片や役人が覚えなければならない刑罰の名前。この『千字文』の中には、刑罰名称だとか官職名というのは一つも出てきません。そして『千字文』を勉強したからといって、行政文書が書けるわけでも決してありません。『千字文』は、貴族の子弟が、いわば教養のために、ないしはそういった意味での学習のために使う学習識字教育書で、この性格としては、『急就篇』の、いわゆる刑罰名称だとか、裁判行政関係の用語が散りばめられた識字教育のものとは、性格がまったく違うということは確認しておきたいと思います。

では、6世紀になって、ないしは5世紀になって、こういった『急就篇』がどのようにして使われていたのか。果たして役人たちはどのような形で勉強していたのか。私も今のところ、六朝時代から漢代が終わった後での文書行政ということに関して、これから勉強していかなければならない問題だと考えております。いつかまた、そのことに関しまして、中世の漢字学習ということで報告することができればと思っておりますが、今日はとりあえず漢代の役人の、いわゆる漢字の学習の一端を紹介することで終わっておきたいと思います。

時間を使ってしまいました。お許してください。

（拍手）

石川 富谷さん、どうもありがとうございました。出土した木簡の写真、特に「以」という字を何十回も書いているような写真を見ますと、私は小学校の国語の授業で、例えば「花」という字を100回書けと言われて、漢字帳に書いたことを思い出しますね。漢代の役人の識字の過程も具体的に明らかにしていただいて、大変興味深かったと思います。また、漢代の文書は残っているけれども、その後の時代のことが実はよくわからないということも、聞いてみると、なるほど史料が地中から出ないことには、

我々は具体的なことを知ることはできないんだなあということも感じさせられた講演だったと思います。

引き続きまして 3 つ目の講演は、本 COE の拠点リーダーであります高田時雄教授にお話しをしていただきます。高田さんは、人文科学研究所では主に敦煌文書、中国のシルクロードに莫高窟で有名な敦煌という町がございますが、そこから出土しましたさまざまな文献を使って、中国の言語の歴史——もちろん漢語、つまり中国語も含めて——および中国語と周辺言語の交渉などを研究していらっしゃいます。

それでは、高田さん、よろしくお願いします。

基調報告 3 「シルクロードと漢字文化」 高田時雄（京都大学人文科学研究所教授）

高田です。お気づきと思いますが、きょうの報告は、一応時代順に並べてあります。私が担当いたしますのは、基本的に唐代の事柄であります。隋唐の文化が、日本の漢字文化の根幹をなしているということは、皆さん重々ご承知のとおりです。例えば毎年秋になりますと、奈良で正倉院展が開かれますけれども、正倉院に納められている文物というのは、まさに唐代の中国文化の精華といえるわけですね。

実は、単に正倉院に当時の中国の文化の精華が残っているということだけではありません。

その背後にある漢字文化というものは、さきほど富谷さんがお話しされたように、漢の時代にはすでに中央アジアのほうにも漢字が伝わっておりましたが、唐の時代になって初めて砂漠を越えて、ずっとはるか西のほうにまで本格的に行われるようになりました。きょうはそういったシルクロード上の漢字文化につきましてお話ししたいと思います。漢字というものは、われわれ東アジアに保存されているものがすべてであるという感覚をお持ちかもしれませんが、実はさにあらずということで、西のほうで漢字がどのように行われたかというお話を、ごくごくかいつまんでさせていただこうと思っております。

これは中央アジアの地図（本報告書 p.67 参照）ですが、実は、この地図上のいろんなところから漢字で書かれたものが出てきます。ご存じのとおりこういった中央アジアの砂漠地帯は非常に乾燥地帯ですので、古いものがそのままの形で残っており



ます。腐らずに 1000 年前のものが非常によく残っているということで、19 世紀のちょうど末ごろから、ヨーロッパの探検隊、少し遅れて日本の有名な大谷探検隊などもそこに隊員を派遣して、特に仏教に関する写本等を搜索させたのですが、そういった探検隊の成果が次第次第に積もり積もってきまして、今日ではヨーロッパの主要な国家には、そして日本にも少しありますけれども、シルクロードの小さなオアシス諸国の漢字文化をかいま見せるような遺物が残っています。これらは今日、我々がこの地域の漢字文化がどのような種類のもので、かつどの程度まで深く浸透していたかということ、考える上での好材料を提供してくれることになっているわけです。

非常に古い話なのですが、はるか西のほうから漢字で書かれた文書が出てまいりました。1933 年の話です。お手元の資料（本報告書 p.68～69 参照）に「ムグ山文書」と書いてあります。ムグ山というのは、今日のウズベキスタン。ソ連邦が崩壊いたしまして、中央アジアの共和国が非常に小さな国に分かれてしまっていますが、そのうちの一つウズベキスタンという国にサマルカンドという町があります。ここは非常に古くから豊かな文明をはぐくんだ都市で、近年益々熱い注目を浴びるようになったソグド人の中心地でありました。ソグド人は非常に古くからここを中心として独自の文化をはぐくんできたわけですが、8 世紀はじめにここがアラビア半島から興ったイスラム教徒の軍隊の攻撃を受けました。その時にソグド人が立てこもったのがこのムグ山です。ここがソグドの最後の要塞だったのです。ソ連の時代にここを発掘しました考古学者が、ムグ山の遺跡から漢文の文書を発見しました。1933 年のことです。今から 80 年近く前の話になります。

ところが、その漢文文書をよく見ますと、ソグド人が書いたものではもちろんありません。ソグド人は交易をもって身を立てる商業民族でありましたから、いろんなところに出没しておりまして、中国にもたくさんの商業植民地を持っておりました。そういったところと常々往来をしております。

この文書もよくよく見てみますと、中に今の甘粛省にあたる地名が幾つか書かれています。例えば交城守捉ですとか、大斗守捉などの名が見られます。守捉というのはごく小さな砦のようなものですが、そういったところでつくられた、唐の年号で神龍 2 年、これは 706 年にあたりますが、その時代の文書が発見されたのであります。

これは明らかにムグ山とは直接の関係を持たない、何らかの関係でその文書を反故として、紙の再利用をすべく、ソグド商人あたりが涼州あたりから持って帰ったものと思われます。それがずっとここに残ったというものです。したがって、これはムグ山の地域における漢字文化が、そこに定着していたということを証明するものでは必ずしもありえないわけです。しかし、西のほうでこういった漢文の文書が発見された最初の事例として、当時は非常な注目を浴びたものでした。したがって、ちょっと前置きとしてお話しをさせていただきました。

さて、先ほども申しましたように、ヨーロッパの探検隊が、中央アジアでいろん

な古いオアシス国家の遺跡を発掘をいたしました。まず最初に触れたいと思いますのは、クチャという町です。地図（本報告書 p.67 参照）で言いますと、水色の丸がついていますが、右から 2 つ目のところがクチャというところですよ。フランスのポール・ペリオという人がここから持って帰った写本があります。配布資料にその写真が載っていますが、これは小さいので、大きくしてご覧いただこうと思います。もちろんすべて漢字で書いてあります。

その中でちょっと注目していただきたいのは、112 番ですね。これは漢文で書かれた一種の契約文書ですが、赤で囲ったところをご覧くださいますと、「胡書の契をつくる」と書いてあります。胡書の契、つまり胡（えびす）の文字で書かれた契ですね。すなわち漢文ではない。この場合、胡書というのは、まさにクチャの土地の言葉、文字で書かれた文書ということです。事実、クチャからは、漢文文書以外に多くのクチャ語で書かれた文書が出てまいります。というよりも、漢文文書の数はずっと少ないのです。

クチャ語の文書とはどういうものかと言いますと、こういう文字で書かれたものです。これは明らかにインド系、すなわちインドから伝わった文字で、ここではこういった文字でみずからの言語を書き写す習慣がかなり古くから行われていたのです。そして唐の時代に長安の政治的コントロールの下に入りますと、唐が漢文文書をもって行政を行うことになります。要するに先ほど富谷さんもお話しされた、文書行政が行われるわけです。単に漢文だけでは、この土地の人々は内容が理解できないものですから、当然ながら並行して、漢文の文書以外に、別にクチャ語の文書をも用意しないといけなかったという状況にありました。

これはクチャだけではありません。タクラマカン砂漠を南のほうに越えたところにコータンというオアシス都市があります。地図で言いますと、ここです。このコータンという町からも漢文文書が出ておりますし、同じくコータン語で書かれた文書も出ております。

興味深いのは、ここにはコータン語と漢文と同じ内容のものが両方一つの文書中に書かれているものがあります。これを見ていただきますと、やはりクチャの場合と同じく契約文書の例で、どれを見ていただいてもほぼ同じです。この 3 つの断片はそれぞれ内容は違いますが、特に真ん中のものが比較的わかりよいかと思います。この契約文書を取り交わしたときの当事者と、それから保証人の名前がずらずらと書き連ねてあります。下側には漢字で書いてあって、その漢字を見ていきますと、どう見ても中国人とは思えない名前になっていますが、これらはその土地の人々なのであります。しかし、その上を見ますと、何かくにくにくとした変な字が書いてありますが、それがコータン語、コータン文字であります。すなわち彼ら自身の言語でこういうふうになまえが書いてある。そして右側のほうの断片を見ていただきますと、漢字の行間に、同じ内容のことがコータン語で書き記されている。いわゆるバイリンガルで

すね。2言語の文書がこのようにして行われていたということで、クチャの場合よりもはっきりとした形で、2つの言語を用いて行政が行われていたことがわかります。

今日の中央アジアといいますか新疆省、中国の新疆ウイグル地区の砂漠の北にありますオアシス都市、それから南にありますオアシス都市の代表格と言ってもいいクチャとコートアンという2つの都市で、唐の時代にこのような2言語で文書行政が行われていたということを、我々はこのように現物の証拠から理解することができるわけです。

そこで、コートアンとクチャの2つのオアシス都市について考えてみたいと思います。我々日本、ないしお隣の朝鮮半島が漢字を導入したときとは、背景と条件がまったく異なっておりました。それは何かと言いますと、こういった中央アジアのオアシス都市では、漢字が入ってくる以前に、すでにかなり高度に発達した文字と文字生活、豊富な宗教經典、この場合は仏教ですね。仏教經典による生活を行っていたという歴史的背景があります。それが大きな違いであろうと思います。したがって、彼らは全面的に漢字に依拠することをいさぎよしとしなかったし、また、その必要もありませんでした。そしてまた、唐の政治的なコントロールはそう長続きするものではありませんでしたから、唐の政治勢力がこの土地を立ち去った後には、また同じように自分たちの言語生活に戻っていったというのが、おそらく推測されるところであろうと思います。

ところが、今日、新疆ウイグル自治区に属する一つの特異な町があります。それがトルファンです。トルファンはどこかと言いますと、地図の一番右側の上に印をつけたところです。ご存知の敦煌はご甘肅省の一番西の端にあるわけですが、そこから北へ出まして、安西という町、そしてハミ瓜で有名なハミという町を経て、さらにそこから北上し、少し山を越えたところに、非常に深いすり鉢型になった盆地があります。それがトルファン盆地ですが、その盆地の中にいくつかの町が存在しまして、そこにオアシス国家があったわけです。

この町は、クチャとかコートアンとは、オアシス都市という性格は同じですが、漢字文化という点について比較をいたしますと、これはまったく違うと言っていいほどの違いを持っております。ここは非常に早くから漢字文化に浴した土地柄でありました。資料に書いてありますように、前漢元帝の初元元年と言いますと、紀元前48年という古い時代であります。ここに戊己校尉（ぼきこうい）という官職が置かれまして、軍隊が駐屯することになりました。さらに高昌壁、高昌壘、高昌郡という名称の変遷をへて、漢人（中国人）が駐留するという時代が続き、さらには中国人がここに地方政權を築いたことがありました。それを「麴氏高昌国の時代」と称しております。

ところが、この麴氏高昌国は、唐が勃興し中央アジアに進出を始めますと、まもなく唐に滅ぼされてしまいます。よくご存じの玄奘三蔵という人がインドへお経を求めて旅をするといったときに、まず最初にここを経由して行きました。トルファンに

入り、麴氏高昌国の王様から非常な歓待を受けて、お金もたくさんもらい、護衛をつけてもらってインドに出発をいたします。ところが、学業を終えてインドから帰ってきたときには、もはやトルファンの高昌国は唐に滅ぼされてなくなっていましたので、わざわざここを経由せずに、敦煌から長安に帰ってきたというエピソードのある町です。

この麴氏高昌国の時代の後に、すぐにまた唐の直轄地として新しい時代を過ごすことになり、この地は一貫して漢字文化に浴していた土地柄といえます。ところが、9世紀になりますと、北のほうにありましたウイグル族という、今、中央アジア、特に東トルキスタンは新疆ウイグル自治区といいますように、このあたり一帯の主要民族となっていますが、そのウイグル族が北からやってまいりまして、ここに根拠地を築きます。そしてチンギスハンのモンゴルが勃興してここを占拠する以前まで、小さいながらも仏教文化を基礎とした、独自のウイグル国の文化を育てていくことになるのです。今から少し詳しくお話ししようと思いますのは、そのウイグル国における漢字文化の話です。

ウイグルがここにやってまいりますと、当然ながらそれ以前から行われておりました漢字文化に遭遇することになります。ウイグル人は、当初は仏教を奉じていたのではなくて、マニ教というイランに起源する宗教を奉じておりました。

ウイグル人がマニ教を信仰するようになった機縁は、ウイグル国の中に、先ほどちょっと話題になりましたソグド人がおりまして、ソグド人の多くがマニ教徒であったという影響があるようですが、当初はとにかくウイグル人はマニ教を非常に熱心に信仰していたのですが、次第次第に仏教に帰依するようになってきます。そしてトルファン盆地に入ってきますと、益々強い仏教の影響下に入るのです。

時間がなくなってまいりましたので、急いで本題に入りたいと思います。そのウイグル国の漢字文化がどういうものであったかと言いますと、我々東アジアの漢字文化と比較して非常におもしろいのです。何がおもしろいかと言うと、共通点多々あるのです。その一つは、ウイグルが独自の字音を獲得したということです。

我々が漢字を読みます際に、日本にはたくさんの字音の層がありまして、一番古く伝わった呉音というものがある。特に仏教では、大体呉音を使ってお経を読むことになっているわけですね。それから後に漢音というものが入りました。これは主として唐の都・長安に留学した人々が持って帰った字音です。また唐音というのが、禅の坊さんなんかを中心にして入ってきました。こういった幾つかの層に分かれているんですが、ウイグルでは、やはり同じようにウイグル字音というものができました。

日本以外ですと朝鮮半島やベトナムに独自の字音があることはよく知られています。ところがこれは非常に不思議なことなんですが、同じようにウイグル国に漢字音があるということは、今までだれも想像しませんでした。これは私が二十数年前に初めて言い出したことなんですが、ウイグル字音というものの存在したことがわかって

まいりました。

今ご覧頂いているのは、そのウイグル字音で書かれた音注です。まん中に「慈悲懺音字卷第八」とありますが、これは仏教の法要に使う「慈悲道場懺法」という懺悔です。その懺悔文は、当然ながら儀式のときに読み上げないといけませんので、どう読むかという漢字一字一字の発音を書いてあるんですね。



これはいわゆる反切という、漢字の発音を2つの文字で表すという方式を主としてとっているのですが、これを細かく分析していきますと、どうしても中国の漢字の発音とは思えないのです。まず声調というものが無い。いわゆる四声というものがそこに見られるとは思えない。それから頭子音といいますけれども、それがものすごく簡略化されている。韻母といいます、主要母音のところも違う。これは明らかにウイグル人がみずからの漢字の発音を書き記したものであるということを、私が発見いたしました。その存在を提唱いたしました。

今日では通説となっております、さまざまな似たような資料が、トルファン出土の写本の中から出てまいりました。こういった写本の断片というのは、すべてウイグル独自の漢字音で音が記されたものです。ここに挙げましたもの以外にも、この頃だんだん増えてまいりまして、当時のウイグル国の漢字音がわかってまいりました。それが一つ非常に大きな点です。こういった中央アジアのシルクロード上のオアシス国家で、日本と同じような漢字の発音、独自の漢字の発音があったというのが一点ですね。

さらにもう一つ、日本と同じように漢文の訓読が行われていたという、非常に重要な点があります。これはウイグルの漢字ウイグル交じり文といいますか、ウイグル文字と漢字を交ぜたもの。日本の漢字かな交じり文と同じような形をとっているのがおわかりいただけるかと思います。

こういったものはほかにもいくつか例があります。漢字部分は、当然ながら音読するわけですね。ウイグル字音で音読します。そしてウイグル文字で書いてある部分は、ウイグル語で読むことになっております。先ほど富谷さんがちょっと『千字文』にちょっと触れられましたが、同じようにウイグルの『千字文』がトルファンから出ております。

配布資料(本報告書 p.69 参照)をちょっと見ていただきたいのですが、「天地玄黄」というのがありますね。『千字文』の頭は「天地玄黄」で始まります。これはだれで

も知っていることです。それを日本では、いわゆる「文選読み」する伝統がありました。「テンチ」とまず音で読みます。その後に「テンチのあめつちは」というふうに、「あめつち」と訓で繰り返します。こういうのを文選読みというんですが、「テンチのあめつちは、ゲンコウとくろく、きなり」と読んでたんですね、昔は。それとまったく同じ文選読みをウイグル人がしているという例がこれです。京大の庄垣内教授の研究でこういったことが明らかになってきております。

今、庄垣内教授の研究成果によって、一例を紹介しますと、この写本には「天地玄黄」の部分がちょうど欠けておりますので、代わりにそこに出してありますのは、「菜重芥薑」という部分です。これをウイグルの『千字文』では、ウイグル文字で *sai cunqai ko* と書いてあります。*sai cunqai ko* というのは、まさにウイグル字音で音読したわけです。その次に続けてウイグル語の訓読が書いてあります。そこにローマ字で書いておきましたが、*qavl-larta'a r ir-li r boldi qaytsi yig sinir bilan* と。これを訳しますと、「野菜では、芥子とショウガが重要だ」と書いてあるんです。要するにまず音読し、その次に訓読するという、日本の文選読みと同じようなものが、ウイグルの漢字文化では発達していたという、非常に興味深い事例がわかるわけです。

もちろんウイグルの漢字文化は、残念ながら今日までは生き残りませんでした。やがてイスラームがやってまいりますと、彼らは仏教を捨てて、イスラームに帰依しました。そのためウイグル漢字文化は完全にその伝統を失ってしまったわけです。19世紀末にヨーロッパ、ないし日本の探検隊がここを発掘して、こういった資料を獲得するまでは、そしてこういった資料に対する研究が進展するまでは、だれ一人としてこういったウイグルの漢字文化の実体を知りませんでした。しかし実はこの地であつて漢字文化が華開いたことがわかる、非常に興味深い事例であります。

我々は、漢字文化というものは、東アジアに独自のものと考えer傾向がありますがけれども、実はそうではなくて、条件さえ整えば、ずっと西のほうにも漢字文化が広がる素地は十分にあったのだというお話を、きょうはさせていただきました。時間の関係がございますので、私の話はこれで終わらせていただきます。

(拍手)

石川 高田さん、どうもありがとうございました。我々が常識で知っているような音読み、訓読みというものが、はるか中国の西のほうにまでかつては存在したということで、私もきょう初めて伺いまして、大変興味深く感じました。それと同時に、漢字文化の底力というんですか、東は日本、西はタクラマカン砂漠の彼方までそうした影響が及んでいたという、大変興味深い内容だったと思います。

それでは、基調報告の最後としまして、人文科学研究所教授の井波陵一さんにお話をいただきます。井波さんは、中国学の中でも主に中国文学を研究しています。中国

の有名な小説に『紅樓夢』というのがございますが、その『紅樓夢』の専門家で、最近『紅樓夢』ばかりでなく、中国の学術史、それから最近の中国における外来の言葉、あるいは外来の概念、西洋思想やさまざまな概念が中国にどのように定着しているのかを研究しておられます。今日は、「漢字と掛けてコカ・コーラと解く。そのココロは？」ということで、このタイトルだけ聞くと、まさに判じ物のようで、何が飛び出すかわかりませんが、楽しみなところです。それでは、井波さん、どうかよろしくお願いいたします。

基調報告 4 「漢字と掛けてコカ・コーラと解く。そのココロは？」

井波陵一（京都大学人文科学研究所教授）

ただいまご紹介に与りました井波陵一と申します。「漢字と掛けてコカ・コーラと解く。そのココロは？」などというタイトルを掲げてしまいました。これまでのお三方に比べると、格段に格調に乏しいというか、品のないタイトルですが、本日お話しする内容を簡潔に申し上げると、「漢字と遊ぼう」という一言に尽きるのではないかと思います。



それがどうしてコカ・コーラと関係あるんだ？という疑問はごもっともであります。最後に「なるほど、そういうことか」と納得していただければありがたいと思っております。

【漢字の3要素】

さて、漢字の性質として形・音・意味の3要素があることは、皆さんよくご存じでしょう。ところがこの3要素、どれもなかなかのいたずら者でありまして、そう簡単に言うことを聞いてくれません。

まず形ですが、最もお手本とすべき優等生の書体として楷書があり、字の上手な方が雅にしたためられる行書があり、変な言い方ですが、精神がほとぼしる芸術とも言うべき草書があります。それ以外にも、古代の石碑などに残っている、奴隸の隷の字を使った隷書とか、もっと古い時代には、ハンコを彫ることを篆刻とありますが、その「篆」の字を使った篆書がありますし、さらに遡れば青銅器に刻んだ金文とか、亀

の甲羅や牛の肩胛骨に刻んだ甲骨文などという、歴史的な字体も存在します。また、別の視点から見れば、旧漢字と当用漢字の区別があります。中国でそれに相当する対応関係は繁体字と簡体字ですが、日本の当用漢字と中国の簡体字は基本的に別物です。これにたとえば教科書体というような〇〇体、勘亭流というような〇〇流を加えると、1つの漢字の形は微妙にあるいは大胆に変化して、使い手である我々を悩ませることになります。

音はどうでしょう。「どこどこに行く」という場合の「行く」の字を取り上げてみましょう。いわゆる音読み、すなわち日本漢字音について考えてみると、まず行動、実行、銀行というように「コウ」という発音があります。ほかに、もう出てきましたが行書、修行というように「ギョウ」という発音もあります。あまり数は多くありませんが、行灯、行脚というように「アン」という発音もあります。そのほかに慣用音などというものもあり、たとえば「重い軽い」の「重い」の字の場合、我々が最もよく使う「ジュウ」という音は慣用音、より少ない頻度で、たとえば「重複」といった熟語のように「チョウ」と発音するのが、何と言いますか、むしろ正式の音であるようです。

さて、「行く」の字に話を戻しますと、中国語の発音はといえば、現在のアルファベット表記では、xing、すなわち「シン」という発音と、hang、すなわち「ハン」という発音があります。日本漢字音の相違がおもに中国から伝わってきた時代や状況の違いによるものであるのに対し、中国語の音の相違は意味の相違と関わっています。たとえば「行く」とか「行う」とかいう意味である時に「シン」と発音されますし、「ならび」や「おみせ」の意味であれば「ハン」と発音されます。したがって日本語では同じ「コウ」であっても、「行動」の「行」は「シン」であり、「銀行」の「行」は「ハン」であるという食い違いが生じます。「ギョウ」の場合も、「行列」の「行」であれば「ハン」、「修行」の場合であれば「シン」となります。まったくもってややこしい限りです。

すでに意味についても触れましたが、たとえばフラワーの「花」という字の場合、「花」のほかに「模様」という意味があります。これはまだなるほどと思えますね。その「花」なのか「模様」なのか、どちらでもいいのか、とにかくその意味に由来する言葉として「天花」という言葉があります。仙女でも舞い降りて来そうですが、じつはこれ「天然痘」の意味なんです。また、日本語では動詞として使うことはほとんどありませんが、中国語ではたとえば「目がかすむ」とか「お金を使う」「エネルギーを費やす」といった意味で使われます。また形容詞として「遊び好き」という意味もあり、「花花公子（はなはなこうし）」、中国語では「ファファグンズ」というのは「道楽息子」のことです。

さて最初に申し上げたように、私のお話は「漢字と遊ぼう」であって、「漢字に悩もう」ではありません。いま申し上げたような形・音・意味のややこしさを逆手に取っ

て、人々はどのように漢字と「遊んで」きたのか、その中身をチラッと覗いてみようというものです。

【形で遊ぶ】

まず形で遊んでみましょう。漢字というのはいくつかの部品から成り立っているのが普通です。それ以上割り切れない数字を素数といいますが、それと同じように、それ以上分解できない、すなわち部品が一つしかない漢字、たとえば「一」とか「日」「月」とかいった漢字がそうですが、そういったものも少なからず存在するものの、より多くの漢字が、たとえばヘンとツクリを持つように、分解可能です。そうした性質を学問的にマジメにではなく、遊びとして分解・利用することがいつの時代にも行われてきました。さっそく2つばかり例を挙げてみます。

まず嵇康という3世紀の人物のエピソードです。



嵇康と呂安は親友であった。ふと相手のことを思うたびに、車をいいつけて千里のかなたまで会いに行った。呂安がのちにたずねて来た時、たまたま嵇康は不在で、兄の嵇喜が外へ出て招き入れたが、安は入らず、門に「鳳」の字を書きつけて帰っていった。喜は意味がわからず、それでも嬉しがっていた。「鳳」の字を書いたもともとのは「凡鳥」ということだった。

「鳳」と書かれて嵇喜はそれこそ喜んだのですが、じつは「鳳」の字を上下に分解した「凡鳥」、すなわち凡人とけなされていたわけです。言語遊戯と呼ぶにはなかなか辛辣なエピソードであります。いま「千里」という言葉が出てきましたが、この2文字にも有名なエピソードが残されています。2世紀の末に董卓という残忍な将軍がいました。『三国志』に登場するので、ご存じの方も多いと思います。さて彼が暴虐の限りを尽くしていた時、都では次のような歌が流行ったのだそうです。

千里草 何青青 千里の草 何ぞ青青たる
十日卜 猶不生 十日卜するも 猶お生ぜず

表面上の意味は、「千里のかなたまでも青々と草が茂っているが、たった十日の命を占ってみても、それさえおぼつかない」ということです。実際には何を言おうとしたのでしょうか。「千里の草」は「草千里」と入れ換えれば、「クサカンムリ＋千＋里」で「董」という字になりますし、「十日卜」も「卜日十」と逆さにすれば、「卜＋日

＋十」で「卓」の字になります。つまり「董卓」の2文字を分解しているわけで、「董卓め、今は好き放題やっているが、このままのうのうと生きていられるものか」という意味になるわけです。

文字を分解して楽しむ——落語の「タイラバヤシかヒラリンか」に出て来る、「イチ・ハチ・ジュウのモ〜クモク」などもこの仲間に入るのでしょう。

【音で遊ぶ】

では音の場合はどうでしょうか。正真正銘、遊びの場面を『紅樓夢』という18世紀の小説から拾ってみましょう。一種の謎々ですね。

猴子身輕站樹梢〔^{さる}猴子は^み身も^{かる}軽く^{えだ}樹梢に^た立つ〕——ある果物の名前を。

答えは「荔枝」です。なぜそうなるかと言えば、「樹梢に立つ」というのは「枝に立つ」、すなわち「立枝」、「立枝」の発音は「リーチー」で、「荔枝」はこれと発音を同じくする、したがって正解は「荔枝」となるわけです。出題でいきなり「立枝」すなわち「リーチー」と言うとすぐに答えが分かっしまいますから、そこは一ひねりしてあります。

この『紅樓夢』の最初のあたりに、「霍啓」という使用人がお嬢さんのお守りをしていた際、ちょっと目を離した隙にそのお嬢さんを誘拐されてしまう、それがケチのつき始めで、その家には次々と不幸が襲いかかるというエピソードがあります。「不幸が襲いかかる」、すなわち「禍が起きる」ということですが、「禍起」の2文字は中国語で「フオ・チー」と発音します。じつは使用人の名前の霍啓、この2文字の発音も「フオ・チー」なのです。これなども音による遊びと言っていいでしょう。

【意味で遊ぶ】

意味の場合はどうでしょうか。たとえばこういう笑い話があります。

丁^{てい}大全は宰相になると、宦官の董^{とう}宋臣と結託した。(中略)ある日、宮中で宴会があつてコントが演じられた。一人がドラばかり鳴らすので、もう一人が鞭で打ち、「今日の宴会ときたら、ほかの楽器による演奏はせずに、ただひたすら^{ディンディン}丁丁董董とドラを鳴らし続けるだけじゃないか。いったいどうしてだ」と言うと、「いまは万事が^{ていとう}丁董^{ディンドン}の世の中だろ。丁董やらずにすまないよ」と答えた。

時の権力者の名字の音をドラの音に喩えて諷刺したものです。また脇道にそれて恐縮ですが、「ディンドンとドラが鳴る」ならぬ「ディンドンと鐘が鳴る」というのは、たしかオードリー・ヘップバーンが主演した「マイ・フェア・レディ」の歌の文句だ

ったかと記憶しております。

【文章で遊ぶ】

一つの文字ではなく、文章として遊ぶ場合もあります。昔の中国の文章は基本的に句読点を施していませんが、そのことを物語の要に利用している例を挙げてみましょう。翁健という老人は男の子に恵まれず、娘婿に財産を狙われていました。ところが思いがけず 80 歳になって側室との間に男の子ができます。しかし男の子が生まれてわずか 3 か月で、翁健老人は重病にかかってしまいます。実の息子に財産を譲りたいが、このままでは娘婿に横取りされてしまう——そう考えた老人は一通の遺言状をしたため、そこにはこう書いてありました。

八十老翁生一子人言非是吾子也家業田園尽付与女婿外人不得争執

娘婿の前で読み聞かせた時、この一文は①のように解釈されました。

①八十老翁生一子。人言非是吾子也。家業田園尽付与女婿。外人不得争執。

訓読すると、「八十の老翁、一子を生む。人は言う、是れ吾が子に非ざるなりと。家業・田園、尽く女婿に付与す。外人は争執するを得ず」になります。「外人」とは「よそ者」の意味です。すべて女婿に譲ったように見せかけ、赤ん坊である実の息子が殺されないよう配慮したのでした。しかし老人の真意は②のように句読点を施すものでした。

②八十老翁生一子。人言非、是吾子也。家業田園尽付与。女婿外人、不得争執。

訓読すると、「八十の老翁、一子を生む。人言は非にして、是れ吾が子なり。家業・田園尽く付与す。女婿は外人なれば、争執するを得ず」になります。20 年後、名裁判官が現れて老人の真意を見抜き、財産はめでたく実の息子のものになったのでした。

読み替えと言えば、訓読でも遊ぶことができます。『論語』の中に、「酒無量不及乱」という 6 文字があり、マジメに読めば、「酒に量無し、乱に及ばず」となって、「酒を飲むのに分量は決めないが、乱れるほどには飲まない」ということになります。ところがノンベエのわが先生はこの 6 文字を、「酒は量として乱に及ばざる無し」と読み、孔子先生も「酒は乱れてしまう分量まで飲まずにはおかない」と言うてはるでえ、お銚子もう一本！ と嬉しそうに叫んでおられました。いやはやまったく……といったところですよ。

【典故で遊ぶ】

次は「典故」を活用して遊ぶ方法です。「典故」とは、よりどころとなる故実、「有職故実」の故実のことですが、簡単に言えば古典の文章や先人の詩句を下敷きにして創作することです。これが上手にできればできるほど、学識豊かな人として尊敬されました。「典故」を活用して遊ぶ方法はいくつもあるのですが、ここでは『紅樓夢』から射撃の射と覆面の覆を書く、読みはセキフとなる遊びを紹介しましょう。セキは当てるとという意味、フは隠されたものという意味です。

一人が部屋の中にある物や文字について、古典の文章やエピソードを踏まえた上で一つの文字を口にする、それに対してもう一人が、相手の一言と部屋の中にある物や文字とを照らし合わせて見当をつけ、直接その答えを言うのではなく、こちらもまた別の古典の文章を口ずさみ、最初に問いを発した者がそれを正解と認めれば、お互いにニッコリ笑ってお酒を一杯飲む、というものです。一度お聞きになっただけでは何が何やらさっぱり分からないと思いますので、具体的にみてみましょう。

たとえば出題者が「人」と言います。解答者が「人」一文字ではあまりに漠然としていると言うと、出題者は別に「窓」と言います。解答者は「人」と「窓」に共通する典故をもつ文字が「鶏」であることを悟ります。「鶏人」は古代の官職の名称、「鶏窓」というのは、飼っていた鶏を窓辺に置いていたところ、その鶏が人の言葉をしゃべるようになり、お互いに話をしているうちに飼い主である人間の学問が大いに進歩したという不思議なエピソードに基づく言葉で、後世では勉強部屋を意味する熟語として用いられるようになりました。というわけで、解答者は「埒（ねぐら）」という字を口にします。出題者は相手が「鶏は埒に棲（やど）る」という古典を踏まえて「埒」と言ったことを理解して正解と認め、互いに一杯飲みました。「鶏」というキーワードをどちらも直接口にしないまま、問答は見事に成立したわけです。

優雅と言え
ば優雅ですが、
しんきくさい
と言えはしん
きくさい所が
あります。実際、
『紅樓夢』の中
でも、「そんな
かったるいの
はイヤや、他の
にしよう」と文
句を言う登場人物がおりました。



【歇後語】

さて、中国には「歇後語」という言葉遊びがあります。「しゃれ言葉」などと訳されるのですが、語句が前半と後半に分かれ、前半が謎かけ部分、後半が謎解き部分に当たります。たとえば、

丈八高的灯台——照遠不照近

というのがあります。一丈八尺の高さの燭台、蠟燭を点す台ですね。時代によって異なりますが、一丈八尺はだいたい 5～6 メートルでしょうか。

「丈八」というと、『三国志』がお好きな方は、張飛が「丈八の蛇矛」を武器にしていたことを思い出されるかも知れません。いま「だぼう」と読みました。「矛盾」の時には「む」と読むぞ、とお思いの方もいらっしゃるでしょう。これが最初に申し上げた日本漢字音の違いで、「む」は 5～6 世紀に、現在の南京を中心とする地域から入ってきた音で呉音と呼ばれます。「ぼう」の方は、やや時代が下って、例の遣唐使が派遣されていた頃、当時の都である長安で学んだ音であり、漢音と呼ばれます。我々が漢文を読む時には漢音で読む場合が多いのですが、仏教に関係する言葉については今でも呉音が使われます。日常語でも、たとえばドリームの「夢」の音読みはと聞かれたら、「む」と答える方が圧倒的だと思いますが、これは呉音です。漢音は「ぼう」ですが、可哀想にほとんど使われていません。ついでに申し上げれば「蛇」の字を「じゃ」と読むのは呉音です。漢音では「た」であり、「だ」と濁るのは慣用音だとされています。ちなみに吉川英治の『三国志』、私が読んだのはもう 40 年以上も昔ですが、たしか「じゃほこ」とルビを振っていたと思います。まだ頭が柔らかい頃に読んだので、よく覚えています。

さて「灯台」に戻りましょう。海岸の灯台でしたら、一丈八尺ではべらぼうに大きいというわけでもありませんが、燭台であればかなりの高さになります。それが意味するところは「遠きを照らすも近きを照らさず」というわけで、日本語でもよく使われる「灯台下暗し」と同じように用いられています。次の例はどうでしょう。

和尚打傘——無法無天

「和尚さんが傘をさす」——それがどうしたと言いたいところですが、なぜ「無法無天」、つまり「法を無いものとし天を無いものとする」意味につながるのでしょうか。「無天」の方から言えば、傘をさすと空が見えない、すなわち「天が無い」ことになります。この場合の「天」とは世界を秩序づけるものといった意味を持ちます。ですから「無天」で、秩序なんて知ったことか、ということになります。それじゃあ「和尚」と「無法」はどうなんだと言いますと、お坊さんは髪の毛を剃っているので「無髪」です。じつはこの「髪」の字の音は、fa のファーなんです。法律の法も同じくファーなんです。したがって「和尚」＝「無髪」＝「無法」というつながりになります。

そこで謎解きの部分は「無法無天」、すなわち何はばかりことなく思い切ってやる、という意味になるわけです。かつて文化大革命の時期にこの歇後語は大変よく流行りました。のちに中国のロックンロールの第一人者である崔健（ツイージェン）は、明らかにこの言葉とそれがもたらした歴史的現実とにこだわりつつ、「仮和尚」（ニセ和尚）とか「拿錯的雨傘」（取り違えた雨傘）といった曲を生み出したのでした。

もう一つ紹介しましょう。

孔夫子搬家——全是書〔輸〕

「孔夫子」というのは孔子先生のこと、「搬家」とは引っ越しのことです。孔子先生がお引っ越しする——すべて本ばかり、というわけなんです、が、「書」の字の音は、shuのシューであり、輸出輸入の「輸」の字も中国音では同じです。では「輸」の字の意味はといえば、「負ける」なんです。つまり「すべて本ばかり」は「すべて負けばかり」に変身することになります。したがって、たとえば「1990年代の阪神タイガースは、孔子さまのお引っ越しやったなあ」というように使えるわけです。これは「何々と掛けて何と解く」という言葉遊びに転用できるわけで、「1990年代の阪神タイガースと掛けて何と解く。孔子さまのお引っ越しと解く。そのココロは？シュー、すなわち負けてばかり」と言うことができます。この言い回しで、私が子供の頃に最も流行ったのは、いささか尾籠な話で恐縮ですが、「コカ・コーラと掛けて何と解く。トイレと解く。そのココロは？スカッとさわやか」でした。そこでコカ・コーラさんへの罪滅ぼしの意をこめて、本日のタイトルに「漢字と掛けてコカ・コーラと解く。そのココロは？」とやってみた次第です。答えは……いまスクリーンに出た4文字です。可能の可に口、もう一つ可能の可に楽しいの4文字で、「可口可樂（かこうからく）」です。これはコカ・コーラの中国語訳、発音すれば「ke kou ke le」となって響きがきわめて似ている、しかも意味はといえば「口にす可し楽しむ可し」となり、飲み物として絶好のキャッチフレーズになるわけです。というわけで、改めて言い直してみますと、「漢字と掛けて何と解く？コカ・コーラと解く。そのココロは？口にす可し楽しむ可し」——本日ご紹介したいいくつかの具体例が、皆さんにとって味わい楽しめるものであったことを念願しつつ、私の拙い話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

（拍手）

石川 井波さん、楽しいお話どうもありがとうございました。私も今話を聞きまして、ああ、なるほど、こういう読み方があるんだなと感心しました。

漢字や言葉を楽しむということで言うと、少し前にNHKで「連想ゲーム」という

番組があって、私は存外楽しかったと思うんですけども、最近はにぎやかなタイプのクイズ番組に押されて、ああいう番組がなくなっています。私たちが言葉を使って日常的に遊ぶということもだんだん少なくなってきていて、それが漢字文化の衰退とどこかでかかわっているかもしれないと、そんなことを感じさせられました。

今の井波さんのお話をひきとると、「お後がよろしいようで」となりますけど、3時45分まで休憩の時間を取らせていただきまして、その後でパネル・ディスカッションを開始したいと存じます。



パネル・ディスカッション

司会：石川 禎浩、パネラー：岡村 秀典、富谷 至、高田 時雄、井波 陵一

石川（司会） ただいまからパネル・ディスカッションを始めます。私どものオープン・フォーラム「漢字文化の今」は、今回で5回目です。私どものCOEは、「漢字文化の全き継承と発展」を課題として掲げているわけですが、単に最先端の学問としてそういうものを追求するだけでなく、我々が日頃漢字というものを使って研究しながら感じていることを、市民の皆さんと一緒に考えていこうということでこの企画を設けて、今回が5年目になります。

第1回は、中国、韓国における漢字の使用の状況がテーマでした。我々はよく漢字文化、あるいは漢字文化圏と申しますが、日本だけではなくて、韓国や漢字の本家である中国での状況はどうなんだろうということを第1回で検討しました。

第2回は、地名・人名と漢字がテーマでした。地方自治体の再編（町村合併）などの影響で地名が大きく変化しようとしている、あるいは人名のつけ方、人名の漢字が非常に揺れてきているという背景を踏まえて、人名や地名と漢字ということを話し合いました。

3年目は漢字と教育についてでした。つまり、我々の漢字力が落ちている、あるいは漢字文化の割合・地位というものが、日本社会の中でどんどん低下しているという危機を背景に、教育現場はどのように対応しているのだろうかということをテーマとして、漢字と教育ということをやりました。

そして去年が、この会場をお借りして「漢字とマスコミ」について討議をしました。



例えば、「拉致〔ら致〕」問題にせよ、問題の「隠蔽〔隠ぺい〕」にせよ、さまざまな漢字の表記がマスコミ——テレビ、新聞、雑誌——で非常に揺れ動いていて、これが我々の漢字への感覚に強い影響を与えているということを念頭に置きまして、京都新聞や共同通信の記者さんに来ていただいてお話を伺いました。

今年は5回目です。我々の21世紀COEプログラムは5年計画でして、今年度が最終年度にあたります。したがって、きょうのオープン・フォーラムの5回目はそれを総括する位置づけです。冒頭の高田拠点リーダーの説明にもありましたように、我々が日ごろ漢字を媒介にして接している研究を存分に語って、漢字と我々の研究と、そして市民社会とといったいどんなかわりがあるのかということ、ざっくばらんに語り合おうということで、きょうの会を設けさせていただいたわけです。

まず、いくつかご質問をいただいておりますので、それを紹介いたします。関係するパネラーにお答えいただき、なるべくそれに引きつけながら討論を展開したいと考えております。

最初は、岡村先生への質問です。「ご報告の冒頭で、白川静先生の漢字学に言及なさいました。評価についてはお述べにならなかったけれども、どのように評価していらっしゃるんですか」という質問です。もしお考えであれば、ということですので、簡単に結構ですから、岡村さんお答えいただけますか。

岡村 私の専門は考古学ですから、漢字を直接研究しているわけではないんですが、白川先生の書かれたものは、たびたび拝見しています。私の理解するところでは、漢字研究においては、白川先生を読まない、なかなかわからないところが多いと考えております。

漢字の研究というのは、後漢時代の許慎という人が書いた『説文解字』という辞書がスタートになって、その後研究が進むのですが、白川先生の場合は、それに甲骨、そして金文という出土文字史料を使って、古代にさかのぼって研究を進められたというところで、新しい研究をスタートさせたという点で高く評価できます。

きょう私がお話いたしましたのは、漢字の組み合わせとしてできる文章が、どういうふうに使われていたのかということをテーマにしましたので、直接白川先生の研究に言及したわけではないんですが、古代において漢字がどういうふうに使われていたのか、そして漢字の意味ということを考える上では、どうしても読まないといけない先行研究だろうと考えております。



石川 ありがとうございます。もう一つの質問、これも個別の質問なんですけれ

ども、井波先生にです。「きょうのご報告の中で、漢字の形、音、義（意味）について言及された際に、“音”の字を“オト”とおっしゃったけれども、これは“オン”と読むほうがよいのではないか」という質問なんですけれども、いかがでしょうか。

井波 「形（ケイ）」、「音（オン）」「義（ギ）」と読む場合は、ごもっとも「ケイ」「オン」、「ギ」であります。私、きょうのお話しの際には、「ギ」と1文字だけ発音するのは、しゃべるほうもお聞きになるほうもわかりにくいかなと思って、わざと「カタチ」、「オト」、「イミ」というふうに言い替えたんですが、日ごろ「ケイ」、「オン」、「ギ」と言っておりますものですから、つい「オン」と発音してしまったのかもしれません。その点、おわびいたします。

石川 次は、アジアにおける漢字の使用についてのご質問です。「現在、朝鮮半島、つまり韓国や北朝鮮では、すべてハングル文字で表記されているようですが、漢字はまったく使わなくなってしまったのでしょうか、あるいは学校では漢字教育はなくなってしまったのでしょうか」という質問が来ています。韓国や中国での漢字学習については、第1回のオープン・フォーラムの際に、韓国の先生にお話をうかがったんですけれど、高田さん、いかがですか、現在の状況というのは。

高田 私は朝鮮のことは専門ではございませんので、正確にお答えできるかどうかわかりません。ただ、北朝鮮、韓国、両方とも漢字の使用量は、日本に比べるとずいぶん少ないように見受けられます。さらに学校教育においては、正課としては、少なくとも北朝鮮では漢字を教えていないし、韓国でも一時期、学校教育で漢字を教えない時期がありました。そういう世代があったようです。これは日本で戦時中に英語を習わなかった時代があったというのと同じですけれども、今はまた教えているようです。

ただ、私が思いますのには、朝鮮、韓国で漢字というものが、近い過去、100年、200年ぐらいの範囲で考えますと、日本に比べて漢字使用の頻度といいますか、ありていに言いますと識字率は、日本ほど高くなかっただろうと思います。それが今日の文字使用に直接反映している可能性があるなという気がしています。つまり、わりあい簡単に漢字を捨てることができた条件がある。

一方、日本は漢字を捨てることができなかった。江戸時代300年の長い漢字使用の伝統が、日本には非常に深く浸透していましたので、漢字をなくすということは当面考えられなかったんだらうと思います。明治時代すでに漢字廃止に向かうアクションがありましたし、最も近い過去で言いますと、先の大戦が終わった時に少しその方向に傾きかけたことはありますけれども、おそらく本格的に漢字をやめるというオプションは、その当時の日本では起こり得ませんでした。ところが朝鮮半島では、かなり

大胆にそういう転換を図ったようなことがあるのではないかと思います。

ご指摘のように、韓国に行きますと、看板なんかはほとんどハングルですね。漢字はあまり見られないのは、そのせいだろうという気がしております。

石川 ありがとうございます。

このほかに、いくつか識字率にかかわる質問が来ていますので、とりまとめて質問いたします。これは広がりを持つ話題だと思うんですけども、岡村先生が触れられた時代や富谷先生がお話しになった時代では、「役人以外の識字率はいったいどのぐらいと考えればいいのか」という質問です。それから現在の中国にあっても、いわゆる出稼ぎで都市部に来ている「民工」と言われている人たちの識字率はいったいどの程度なのでしょうかという質問が来ています。

また、識字率とも関連するんですが、「例えば、楔形文字や古代エジプトの象形文字といった、ほかの古代文明の文字は滅んでしまったのに対して、形の複雑さからしても、書写の面からしても、より難しく見える漢字が生き残った理由はいったいどこにあるのでしょうか」という大変大きな質問が寄せられています。音読みがあったり、訓読みがあったり、さらに慣用読みがあったりする難しい文字を駆使して、今日わたしたちは日常生活を送っているわけですが、こうしたむずかしい文字が、三千年来一貫して存在してきた、その理由はいったいどこにあるのでしょうかという、大変本質的な質問です。

まず、古代の識字率ということに関して、岡村さん、富谷さん、現在の研究ではどのように考えればいいのかということになっているのですか。

岡村 私のほうは、きょうは漢代のお話の中で、鏡というのが庶民の間に広まったと。そしてその中の銘文に書かれている内容は、庶民の感情、あるいは世相が反映されているんだというお話をいたしました。したがって、庶民の間でもかなり文字を読むことができたのではないかと、したがって、識字率はずいぶん高かったのではないかと考えております。

富谷さんのほうから、それはどうかという疑問が呈されたわけなんですけれども、どれぐらいの識字率であったのかというのは、具体的にはよくわからないわけです。しかしながら、ある程度読める人はいただろうと思います。そしてその人がその銘文を口ずさめば、銘文の内容は当時の流行歌みたいなものだったので、この鏡にはどうということが書いてあるのかということは、ある程度わかったのではないかと。完全には読めなくても、ある程度雰囲気を読み取ることができたのではないかと考えております。その普及度の深まりというものが、漢字が三千年にわたって継承されてきた大きな理由だろうと考えています。

ただし、今申し上げたのは漢代のお話で、それ以前の時代は、やはり専門の書記官

がいて、その人がほぼ独占していたのだろうと考えております。

富谷 識字率および識字ということに関しては、実はよく聞かれる質問なんです。ただ、私がはっきり申し上げられるのは、申しわけないけれども、これはむずかしくてわかりませんと、まず最初にお答えしなければなりません。と申しますのは、いろんな分野で識字率の定義がはっきりしている



のかと言えば、実はそうでもなさそうです。何人かの方からご質問が出てきたということで、その質問された方に逆に、「識字率というのはどうお考えですか」と聞いたときに、いくつかのパターン、ないしは段階がどうしてもあると思うんです。

例えば、これは字なんだけれども、それを一字一句たりとも認識できない、わからないという段階。きょう高田先生がお見せになったウイグル文字を我々が見たときに、まったくわからない。このごろハングルが日本にもよく入ってきておりますので、その認識度はかなりパーセンテージが上がってきたと思いますけれども、漢字であれば何となく意味がわかるのが、まったくわからない状態。この状態から、例えば自分の名前は書けるけれども、ないしは自分の名前がそこに書いてあるのはわかるけれども、そのほかのむずかしい漢字はわからないという段階がある。それからある程度、それこそ常用漢字ないしは小学校レベルのものはわかるけれども、それ以上はわからない。識字というひと言をとっても、いくつかの段階があるといわねばなりません。

そこで、漢代、古代において、例えば官吏ないしはそれぞれの民衆のレベルが、今私が申し上げたどのレベルをもってわかるのかというその基準がないものですから、「わかりません」、「むずかしいのです」と答えるしかないのです。

もう一つは、きょう私がお見せしました木簡を出しますと、木簡に書かれたことを何人の普通の農民が読めたのかということになりますと、大変少ないと申さざるをえない。当時想定されている中では、それこそ1けたのパーセンテージの非常に低いところだと、私は思っております。つまり行政文書を認識して、そしてそこに書かれていることをはっきりわかるというレベルは。

結論から言いますと、それは大変重要な質問なんですけれども、私自身では、「何%です」ということに対しては、いくつかの段階もありまして、どの段階で指すのかということで答えも変わってきますし、また、その調査のやり方も変わってきますので、きちんとしたご返答になっていないことを承知で、このように答えさせていただきます。

石川 ありがとうございます。中国の最近の、いわゆる出稼ぎ労働者の識字率については、私は現代の中国のことを研究しておりますので、中国での調査の結果をちょっとご紹介します。例えば、上海や北京の大都会に農村から出てきて、あばら家のようなところに住んで、日雇いの仕事をしているような出稼ぎの方がたくさんいますが、雑誌や新聞を基本的に読めるという程度の識字率で言いますと、70%から 80%の出稼ぎ労働者が、我々の考える識字というレベルに基本的に達しているということを、伝え聞いております。



識字率ということ言いますと、それが常に問題とされるほど、漢字はほかの言語に比べてむずかしいわけですね。そして、むずかしいがゆえに、かつては日本でも漢字の使用割合をなるべく減らして、「仮名」にしていこう、あるいは極端な例で言うと、ローマ字化していこうという機運がありました。中国でも、なるべく漢字の画数を少なくして、それで識字率を上げていこうという試みがなされましたし、あるいは漢字学習の便のために、漢字の音をローマ字で表記して、それによって学習の効率を高めようということが行われました。中国でも、民衆教育を唱える一部の人々は、極端な場合は漢字を廃止するという動きにでました。つまり、漢字のむずかしさというのは、常に識字率の低さの最大の原因であるという批判を受けてきたわけですね。

ところが、最近中国もそうですし、日本もそうですけれども、必ずしも漢字の使用を制限したり、減らしたりする必要はないのではないか、という議論が主流です。つまり、コンピューターやワープロといった便利な道具が私たちを助けてくれますから、むしろそういった機械の力を借りながら漢字を使えば、漢字がむずかしいということをおぼつかう必要はないのではないかと言われています。

現在の中国政府は、中国語の学習を世界中に広め、それによって中国文化も広く紹介していくという「孔子学院」なる構想を持っています。京都でも立命館大学にはその拠点が置かれていて、中国語学習と中国文化の紹介が積極的に行われていますが、そうした外国での中国語学習推進の際も、中国政府は漢字を放棄しません。外国人にも中国語（漢字）を教えていくということ言いますと、中国は漢字の普及に非常に積極的なように見えます。こうした漢字の広まりは、今に始まったことではないわけですが、それが漢字に生命力を与えていったと考えることはできないでしょうか。

例えば、先ほどの高田さんの講演で、唐の時代には漢字は、東は日本まで広まり、西は砂漠の果てのウイグル族にまで使われていたということが紹介されたわけですが、こうした広がりがあったからこそ、漢字の生命力が今日に至るまで脈々と受け継がれていると言えるんじゃないかと思うんです。高田さん、そのあたりでどうお考えですか。

高田 先ほどの識字率の問題とからめて、私の考えていることをお話ししたいと思います。識字率の問題は、富谷さんが言われたように大変むずかしいんですね。定義の問題ももちろんありますし、レベルにいくつかの層があるので一概に論ずるのが難しいのです。

識字率を研究する際に、欧米で一般的に用いられているのは、古文書の中のサインなんです。これは一般的に計量化しやすい材料として使われます。ヨーロッパの中世に、先ほど私も例として挙げた契約文書みたいなものが、やはりあります。たとえばお金の貸し借りの証文ですね。そこに自分でサインをしているかどうかというところで、識字率を計量化しようということが、一つの方法として用いられます。

最初の紹介のときに言及していただいたように、私は敦煌写本の研究をしております。敦煌には大量の契約文書が残っております。大体9世紀、10世紀のものの点数が多いんですけれども。それを見ていきますと、本人が署名している率は10%に満たない数です。全部で数百点のものを調べてみたんですが、大体そのぐらいですね。そして自分で署名している場合でも、大変下手くそな字で、おそらく自分の名前を書くのが精いっぱいだったんだろうと。阪田三吉じゃありませんけれども、縦横に線を引いたような字であります。これではほかの文字の書くのにはちょっとしんどかったんだろうなということが、想像できるような書体ですね。

わりあいよく書いてありますのは、お坊さんのものです。お坊さんも当然生活に困ると借金をするので証文を書くわけですが、彼らはかなり慣れた手つきで自分の署名を行っている。これは大変おもしろいことで、日本社会にも共通する点だろうと思います。その昔、お寺さんの識字率は一般の人々と比べて高いものがありました。彼らはいろんな機会に文字を書くことをしないとイケないし、日々お経に接触するということで、漢字の知識が蓄積されたんだろうと思いますが、大体そういうことになっています。

石川さんが紹介された出稼ぎの人々の識字率が70%というのは、それから考えると、異常な高水準ですね。これは革命中国の一つの成果であろうと思いますけれども、一方で台湾に逃れた国民党は、さらにそれよりも高い識字率を達成しているわけです。両者に共通していることは、近代における普通教育の徹底ということの一点に尽きると思います。漢字というものの構造のむずかしさということを超えて、すべての人に教育の機会を均等に与えることができれば、識字率というのは、多少の困難は伴うのでしょうけれども、かなり容易に達成できるようです。

そして私が先ほどご紹介したような、かつてのシルクロードの新疆ウイグル自治区では、今日どんなに西まで行っても、中国の国境の端っこまでみんな漢字を使っています。大人も子どもたちも。したがって漢字文化圏は、実は現在において空前の広がりを見せていると言ってもいいのです。これは今だかつてなかったことです。これは明らかに教育の成果としか考えられないと思います。

それは必ずしも中国共産党とか国民党とかの政策の問題ではなくて、さらにその前にある、数百年間の近世時期における漢字習得に対する一種の強い志向性というものがあるのだろーと思います。漢字を学習しないといけない、漢字を身につけることによって、社会的地位が確保されるといった志向性が非常に強かった社会ですね。これはご存じの試験制度とも関係するでしょう。



漢字の知識がないと役人になれない。役人になれなければ社会的地位が得られない。それは経済的な不自由にもつながるという構造を持っていましたから、すべての人が漢字の方を向いていたということが、非常に大きなことだろーと思います。そういった基礎的な漢字学習が近代以前にもさまざまなレベルの学校で、非常に広範囲に行われていたことがわかってきております。

日本はそれに輪をかけたように寺子屋が発達していました。日本の寺子屋で使われた、いわゆる往来物という教科書があります。それを集めている人がおられますが、何千点という種類があるんです。それは恐るべきものがあります。日本は東アジア世界の中でも、そういう意味では初等教育については江戸時代に非常に高い蓄積を持っていた。それが漢字文化を今日まで根づかせている、一つの原動力になっているんじゃないかというのが、私の個人的な見解です。

石川 たしかに、漢字はむずかしい、特に欧米の言語に比べれば格段にむずかしいということはしばしば言われることなわけですけども、教育の普及や社会的な需要があれば、漢字のむずかしさと言われているものは、必ずしも「特段に難しい」というレベルではないとも言えるわけですか。特に初等教育の充実という社会的条件があれば……。

高田 大きくなって一から漢字を勉強される外国の方々、欧米の方々は大変えらいなと思うんですけども、我々、子どものころからやっていると、さほどの困難はないだろーという気はいたします。

石川 そこで、我々のフォーラムは3回目に「漢字と教育」というテーマを設定しました。私たちが大学で日ごろ接している学生たちの漢字の力が近年とみに低下しているということを、グチがましく議論したわけですね。漢字を習得しなければ立身出

世もおぼつかない近世や近代の時代があったわけだけれど、現代の我々はどうだろうという問題意識です。現在、我々の身の回りには漢字の習得を助けるようなものがたくさんあるのに、実は漢字に対する理解力や運用力が、ここ 10 年、あるいは 20 年ほど、ワープロやコンピューターの普及とともに、逆に低下しているようにわたしは思います。日ごろ学生に対して教鞭をとっていらっしゃる 4 人の方は、そのあたりはいかがでしょう。特に、私たちは現在、研究を行うというレベルで漢字を扱っているわけですが、そうした研究のスペシャリストとして、漢字を扱う中国学といった研究の領域が発展していくために、現在の教育現場における漢字の理解力に対して何かご意見、ご感想があれば伺いたいんですけれども、いかがでしょう。

岡村 私のやっている考古学というのは、土器とか青銅器とかいう文字を持たないものを対象に研究しているものですから、考古学者の中には、自分は文字が読めないから考古学をやっているんだと、自虐的に言っている人もおりますし、口の悪い東京のある先生、中国文学の先生なんですけれども、考古学者は文盲だと公言してはばからない方もおられるんで、大変困っているんです。

ただ、中国を理解するには、どうしても漢字を理解しないといけない。しかも、考古学の研究対象は古代が中心になるわけなんですけれども、中国を理解する考古学というのを、最近の若い人たちはあんまりやらないんですね。モノの研究をしても、中国の研究をしないんですね。もう少し具体的に言うと、現代中国語はペラペラ読み書きできるんだけど、古い漢文が読めないという学生が多くなってきております。これは大変困ったことで、それで本当に中国が理解できるのかどうなのか、私は非常に疑問に思っております。やはり高校教育で漢文の時間がどんどん減ってきているとか、あるいは大学入試で漢文がないとかいうこともあって、私どもの考古学の研究者の中でどんどん漢字離れが進んできている。これは大変憂うべきことだと考えております。

石川 きょうの 4 人の方々の講演は、いずれも今の世の中にすぐに役に立つというお話ではなかったわけですが、それでも中国を理解する、ひいては日本文化を理解するという現実的な面でも、漢字に対する力が求められているようにわたしは感じるのですけれども、富谷さんはいかがですか。

富谷 この問題は、3 回目でしたかね、漢字教育を考えるということで、京大の時計台のホールで、小中高および大学の先生をそれぞれお招きして講演をしてもらったことがあります。それぞれの教育の現場で漢字をどうして覚えさせていくのかということが、小学校の低学年から高学年には格段に字が多くなって、はじめは楽しい学習から、それではなかなか進まないのだと、量が多くなるのが原因だというようなこと。

さらに中学、高等学校となりますと、もはや楽しく学習しましょうというようなレベルではなくなってくる、困ったなということです。

漢字の教育ということでも、例えば初等教育、中等教育レベルの字を覚える、読める、書ける、ひらがなから漢字に移すことができる、それから熟語を知っているとか、いくつかの漢字の組み合わせからなる四字熟語だとか二字熟語というものを習得するというレベル、さらには漢字で書いた文章を読める、ないしは書ける、さらには大学のレベルの漢文を読めるといういくつかの段階が当然あると思います。

はっきり申し上げて、そのすべてのレベルにおいて低下しているということ。私は確実に感じます。1字の漢字を習得することがなかなかできなくなっている、ないしはそれを習得していくスピードと、それから人間が少なくなっているということが、ひいては漢文ができないということになってくると思いますね。

どうしたらいいのか、本当に頭が痛い問題で、それこそ会場の方にもお聞きしたいぐらいです。はっきり言えることは、京大生の漢文の読解力は格段に落ちてきまして、大学院のレベルでも、なぜ私がこんな簡単な文法から教えなければならないのかというレベル。これは京都大学の入学試験で漢文がないということが大きな原因をつくったのだと思います。グチばかりで申しわけありませんが、困りました。

石川 それは、単に学生と漢字のみならず、中国文化が日本文化の中に占める割合そのものが、近年とみに低下しているということがあるのではないのでしょうか。例えば、漢文の素養は、明治のころはいざ知らず、昭和に入っても日本文化の中の非常に大事な部分であるということが強調されていて、少なくとも知識人たる者は漢文ぐらいは読めないといけないという前提があって、学生の学力もその上に築かれてきたかと思うんです。

漢字以外のことも扱わないといけない、例えばウイグル語を扱わないといけないような高田さんの場合は、日ごろ接している学生たちの漢字に対する力や、語学についての力をどうお考えですか。

高田 学生と接しているといっても、ほとんどが専攻の学生ですね。そうすると、中国学をやっている若い人ですので、基本的には漢字の能力は普通の人よりはあるということだろうと思うんです。

ただ、漢字の能力がだんだん劣化しているという状況についていうと、これはある意味で、当然のことだなという気がしないでもありません。中国と日本を比較してみると、与えられている条件がまるっきり違います。何が違うかというと、日本にはかながあります。先ほど話題になった韓国ではハングルがあります。こういう、表音文字が漢字以外に存在するということは、決定的な条件の違いです。このごろテレビのクイズ番組なんかを見ていまして、答えを書くのに漢字で書かずに全部ひらがなで、

人名なんかも「おだのぶなが」と書く人が多いようです。かなで書くことができるわけですが、決して書けないわけではない。我々は漢字かな交じり文という非常に効率的な書写の方式をこれまでずっと保ってきて、それが有効に機能をしているので、それを何とか守りたいと考えています。すべてを漢字で書こうとしているわけじゃないですね。

ところが、中国はすべて漢字で書かないといけないんです。ほかに文字を持たないのです。もちろんあります。彼らはローマ字も知っているわけですが、正規の中国語の書写法というのは、すべて漢字で書くということなんです。普通にはほかの文字を混ぜない。

例えば外国人の名前だって、漢字で書いてしまうわけでしょう。これ、困るんですよ。我々も中国語で論文を書いたり



することがままありますが、ヨーロッパの学者の名前を漢字で書かないといけない。さあ、どうするか。有名な人は辞書にもその名前が漢字で載っていますから、辞書を引いて調べればいいんですけども。いずれにせよ全部音訳をしないといけないですね、一字一字。それも現代中国の発音で書く。

一度でも中国の文献に出現したことのある人なら、その名前があるので、現在ですとインターネットで検索して、何とか引っかかってくるケースがありますが、もしないときは自分ででっち上げるわけです。

中国では、とにかく最初にその外国人の名前を漢字で書いた人がだれか一人いるはずだと。そういうことを日々やっているわけですね。これは我々と与えられた条件がまるっきり違います。おそらく決意のほども違うでしょう。我々はかなを持っているために、どんどん安きにつくということになってしまうんですね、ほっておくと。この流れはくい止めないと、全部かなで書くということになりかねない。かつて「かなもじ会」というのがあって、そういう主張をしたことがあるんです。それでもいいんですが、やはり大変不便で、かつ文化の継承という観点から言うと、弊害がすこぶる多い、不利であるということは言えるかと思います。そういったことで、かなを持っている日本で漢字文化を継承するということは、なかなかしんどい課題だなと思っています。

これは何も今日我々がそう思っているだけでなしに、すでに明治のころにもあったようですね。明治というと、日本の漢字文化が最も水準の高かった時代なんです、その当時でも、京都大学のある先生、東洋史の先生ですが、中学生の漢字力はこのごろ劣化したということを嘆いておられます。その文章が残っておりますけれども、そ

の当時でもそうだったんです。いつの世の中でも若い人の漢字力の低下ということは言われていたようですね。

ところが、昔はだんだん成人するうちに、相応の漢字能力を獲得していったんだろうと思うんですが、今日の場合は、少し重症のようです。いつまでもゲームをやっているような感覚だと、漢字能力は永遠に獲得できないだろうという心配があるわけなんです。

石川 漢字運用能力についての危機感について、明治と今の時代を比べるのはちょっとむずかしいとは思いますが、今の高田さんの話を聞いて一つ思い浮かんだことがあります。

明治のはじめのころに、さまざまな西洋の新しい事物が入ってくるときに、明治の知識人たちは、何とか漢字を使って表すわけですね。例えば、「社会」とか「経済」、「哲学」、あるいは何とか「主義」なんていう言葉にしてもそうです。江戸時代までにはなかった西洋の概念を何とか日本語にしないといけないというときに、例えば「ソサエティー」という「社会」に当たる言葉が入ってくれば、従来の漢字の知識を駆使して「社会」という言葉をつくるわけです。そして、のちにこれが日本から中国や韓国に輸出されて、東アジアに広まるわけですね。今、私たちが中国の人と話をするときに、「社会」と言えば、同じものを連想するし、「経済」と言えば、同じ概念を共有できるわけですが、そういった共通の知識の基盤が漢字の上に成り立っていたわけです。ところが、今、そうした状況はどんどん希薄化しています。例えば「システム」という言葉ですが、我々はいま「システム」という言葉をあらためて漢字に置き換えて何とか翻訳語を作ろうとしているのでしょうか。「メカニズム」なんていう言葉も、ほかの漢字熟語で代替できないかなと考えないことはないですけども、そういう言葉を作るよりもカタカナで済ませてしまおうとしがちです。カタカナでも、大体わかったような気分になるからということでしょうか。

「システム」にしても、「メカニズム」にしても、漢字の本家である中国では、今の高田さんのお話を聞くかぎり、当然そんな安易な解決方法はないわけですね。現在の中国での西洋的事物の受容を研究している井波さんには、今でも中国はこんなふうに工夫をしていますよという事例があれば、ちょっと紹介していただきたいのですが。

井波 高田さんの言われたように、中国では漢字を使わなくてはいけませんから、外から入ってきた事物や概念に対して、何とかして漢字を当てようとします。日本語の場合でしたらカタカナですませてしまうところを、似たような音を持っている漢字を使ってくる。そうすると、人間というのはもう少し欲を出して、どうせ似たような音の漢字を使うんだったら、意味まで何となく似たような字を用いたらもっといいんじゃないかという工夫を、今でも中国ではしているのではないかと思います。

もちろんどうしようもなく、ただ単に音の近い文字だけを当てて、それですませるということは昔からあって、18世紀の『紅樓夢』という小説の中には、ヨーロッパのイフナーという頭痛薬が出てまいります。どんな薬か僕は全然わからないんですが、とにかくそれに対して漢字が当ててある。そのイフナーという頭痛薬とそれに当てられた漢字とはまったくつながりがないんですが、しかし、少なくともその時代には、上流階級ではその薬がその漢字名として知られていたということは考えられます。



私、あちこちでしゃべっているんで、この話題は相当煮詰まってしまっているんですけども、日本語の「おでん」という言葉がありますね。中国にはもともと「おでん」なるものはありません。ただ、日本の小説を訳すときに、「おでん」という言葉が出てきたら、どうしても訳さなくてはいけない。我々が中国の食べ物が中国語の文章に出てきたときに、それを何とか訳さないといけないのと同じことなんです。私がいろんなテキストを見る限りでは、当初、おでんというのはいったいどんなものかわからない。そこでどうやら『広辞苑』を引き、『広辞苑』に書いてあることをそのまま中国語訳して、例えば「こんにゃくとかはんぺんとかをぐつぐつ煮たもののお店」とかいうふうにおでん屋さんのことを表記している。

ところが、最近になりまして、1990年代ぐらいですかね、中国にコンビニエンスストアができて、中国ふうではありますが、おでんを売る店が出てきたときに、あれはだれが発明したのか僕は知らない。会社の人が発明したのか、発明者は知らないんですが、おでんに対して大変すばらしい訳語を当てた。先ほどの「可口可樂」に匹敵するような訳語を当てた。中国語で発音しますと、我々が習う発音で言いますと、「アオディエン」ですね。アオディエン、オーディエン、オディエン、おでんに聞こえるんですね。(笑)

最初の「アオ」という字に当てられた文字は、ちょっとむずかしいのでここでは説明しませんが、「ぐつぐつ煮る」という意味を持っている「熬」という漢字を当てた。「ディエン」のほうはどうかと言うと、これは日本でもほぼ日常化している、軽食のことを点心(ティエンシン)といいますね。点という字。あのティエンというのをを使ってアオディエン。そうすると、「ぐつぐつ煮た軽い食べ物」ということで、おでんという日本の持っている食べ物の概念を、中国語としてうまく移し替えるという工夫をしている。

こういったよそから入ってくる品物、概念に対して、とりわけ外国企業の場合は、それを中国で売らなくはいけない。商売ですから。そうしますと、外国製の品物の名称というものを、いかにその品物にふさわしい、インパクトのある漢字にして中国で

売り込むかというのが死活問題になってくるんですね。必死で考えなくては商売が成り立たないというようなときには、いい知恵がいろいろ浮かんでくるのか、これはもう 1980 年代になるんでしょうが、ミノルタというカメラ会社、今でもありますよね。中国語でどういう言葉を使ったか。美能達。写真を撮ったら「美能く達す」と。これを中国語で発音すると、メイノンダー、メノダ、ミノルタというふうに何となく聞こえる。そうした音と意味を兼ね備えた形で、何とかして外国の事物や概念を漢字化しようという意識が、中国では非常に強いのではないかと思います。

人名でしたら、例えばモンローという人がいる。モンローというのは、アメリカの歴史で言えば、モンロー宣言という、閉鎖的な鎖国主義をやったモンローという大統領がいました。その場合には、普通のモンローさんは別の字を当てますが、マリリン・モンローのモンローだけは「夢露」と書きます。同じく「モンロウ」と発音するけれども、その「夢」と「露」という字自体が、すでにマリリン・モンローのオーラみたいなもの、雰囲気みたいなものをその漢字そのものが持ってしまう。そうしたところに漢字化することのおもしろさ、つまり外国の品物、思想をいかに漢字として取り込むかというときに、大変おもしろい結果が現れてくるのではないかと思います。

私が中国の新しい雑誌を見るのが好きなのは、そういう努力というか工夫みたいなものかばっちり決まっているとき、それを見ると、ああ、やったねという快感をこちらでも覚える。

私、何の話をしてたんですかね。(笑) 漢字に外国の概念をどういうふうに移植するかでしたね。

石川 そういう、うまいなあという工夫は、井波さんがお話しになったような、漢字の形で遊んだり、音で遊んだりするという経験の上に花開くんですかね。

井波 そうですね。こういう個別の事例は挙げだしたらきりがありません。私が雑誌なんかで見るよりも、皆さんが実際に中国へ行かれて街を散歩なさった方が、そういう実例をたくさん目にされることでしょう。

それから中国では四字熟語を大変よく使います。いかにも中国ふうの四字熟語で映画のタイトルをつくるといったことも、しばしば見られるわけで、「マディソン郡の橋」を「廊橋遺夢」としたのはその典型的な例だと思います。そうした漢字の持つおもしろさ、音と意味を兼ね備えている、あるいは四字熟語というつながりの中で対象の意味や内容を醸し出していくことのおもしろさというのは、いつまでたっても変わらないのかなという気がしております。

富谷 ちょっと違う方向から井波先生の内容に石を投げたいと思うのですけれども。私は歴史をやっている人間で、そちらのほうの観点から見ますと、きょうの漢字で遊

ぶということは、大変楽しいことでもある。そしてなるほどと思うことでもある。ただ、歴史の方向から考えますと、きょうのような、形で遊ぶ、音で遊ぶ、それから典故で遊ぶ、文章と、だんだんむずかしくなってきましたね。これができる人間とできない人間が、階層としてきちんと分かれてきていたのですね。これを「士大夫階級」といい、また、「読書人階級」と言っておりました。つまり遊べる階級と遊べない階級というものが、中国の長い歴史の中でだんだん形成されてきたのです。

そうしますと、今度はどういうことになるかと言いますと、士大夫階級は社会のエリートであり、そして支配者階級でもある。それと被支配者階級に越えられない一線をつくっていく。それは一つの支配の形態であるという見方も成り立つと思います。士大夫階級は遊べる階級であり、非士大夫階級、つまり文字に関してなじみのない階級は、あくまでも被支配者だと。

漢字というものの一つの便というのは、中国における漢字で遊ぶこの社会の雰囲気というものは、そういった中でも、つまり階層社会の中でも形成されてきた。今度は階層社会がなくなってきたときに、ある面ではこのレベルがだんだんと低下していくというのは、一つの方向かもしれないなと感じました。

石川 そうですね。ありがとうございます。

きょうの報告を聞いて、私も思うところがいろいろありました。漢字というのは、もちろん日本文化の中の非常に大事な部分ですが、同時に中国を理解するための非常に大きなキーなんですね。何と言っても、漢字なくして中国の理解はありえないということ強く感じます。

実は、先ほどの井波さんの講演で、漢字で遊ぶエピソードの中に、「和尚さんが傘をさす」という話がありました。これは「無法無天」に通じていて、好き勝手にやる、暴れ放題という意味ですが、これについてわたしは一つ思い出すことがあります。井波さんのお話でも紹介されたとおり、文化大革命時期にこの言葉はよく使われたわけですが、そのさいのエピソードです。

実は、この言葉は毛沢東自身が、外国人記者の取材を受けた際に言った言葉でもあるんですね。外国の記者に、「あなたの性格、あなたの生き方はどんなものですか」と質問された毛沢東が当意即妙に、「私は“和尚が傘をさす”ですわ」と言ったんですね。中国語の世界であれば、「私は何ものにも束縛されない、自由自在に革命運動をやるタイプの人間だ」と、毛沢東は言いたかったはずです。ところが、その取材をしたのが外国の記者でありまして、その記者にしてみたら、「和尚が傘をさす」という言葉の隠された意味がわからなかったのです。しょうがないからその記者は取材の後で、「毛沢東は自分のことを、傘を持った僧侶であると語った」と訳したわけですね。直訳です。ただ、そうなるとうまく意味が違ってきます。毛沢東は、自分は何ものにもとられない天衣無縫の革命家だと言いたかったのに、一転して革命のためにおのれを犠牲

にし、中国をさすらう修行僧のようなイメージになって外国に紹介されてしまったのです。

つまり、こうした漢字（中国）文化に対する理解がちょっと欠けるだけで、毛沢東の言葉が正確に理解できないということになってしまうわけですね。

さて、もう少し質問をいただいているので、そちらをお尋ねしたいと思います。質問の一つは、これは井波さんへの質問でしょうか。「音読み、訓読みの中にそれぞれ漢音、唐音、それから呉音というものが出てきて、そのほかに慣用音というものがあるとおっしゃったけれども、この慣用音か呉音かというのはだれが決めたんですか」という質問です。これは……。

高田 井波さんに代わって私がお答えします。これは私の専門ですので。（笑）というのは、かつて漢和辞典をつくったことがありますので、漢和辞典についている音というのは、いったいだれが、いつ、どのようにつけたかということを大体知っております。それで漢和辞典の音は、あんまり信用なさらないほうがよろしいかと思います。（笑）私が関与しました少し大きな辞書があるんですが、それは私がつけました。これは中国音韻学の成果を多少とも反映しているもので、私自身はだいたい正しいものだと思っております。

かつて古い時代に出版された漢音とか呉音というのは、実はたいてい江戸時代の韻鏡学者がつけたものです。日本語には五十音図というものがありますね。それに対して中国語の発音は大変複雑なので、それを図表化すると全部で 43 枚の表が必要になります。その図表を「韻鏡」と称します。日本では、江戸時代にその韻鏡にいちいち漢音と呉音をつけていくという学問の伝統がありました。明治以降、新しいスタイルの漢和辞典ができましたときに、漢字一字一字に発音をつける際、その韻鏡学の業績を利用したわけです。ところが、その韻鏡の研究の中でつけられました漢音、呉音というのは、極めて機械的に、そして人工的につくられたでっち上げのものが多かったのです。とりわけ呉音についてはそうでした。

先ほど井波さんが言われた「重」を「ジュウ」と読むのは慣用音だとするのは、おそらく間違いで、これは呉音と見なすべきだろうと思っています。古い江戸時代の韻鏡学の中でつくられた「重」という字の呉音は、大体長く伸びない「ジュ」と書いてあります。この種類の発音に属するものは全部同じです。例えば衆議院の「衆」という字があります。あれは「シュ」と書いてあります。「重」を「ジュウ」というのは慣用音だと。同じように「衆」を「シュウ」というのも、おそらく慣用音と書いてあるに違いありません。しかしながら、「シュ」とか「ジュ」とかいう短い音は、日本語の熟語の中で用いられますと、自然に延びて発音されることが多いんですね。だから、「ジュウ」というふうに「ウ」がつくのは、そのカナ表記を見ると、江戸時代の韻鏡学で呉音とされた「ジュ」とも違うし、「シュ」とも違うじゃないかというので、慣用

音にせざるをえなかったの
だろうと推察します。そう
いう漢和辞典をつくられた
方々は、おそらく中国の音
韻学に対してあまり知識を
持っておられなかった先生
ではないかと思います。慣
用音は、そういうことで私
自身の頭の中ではすでに解



決ずみでありまして、多くは呉音です。もちろん本当の慣用音もありますが。そうい
ったところでは、漢和辞典をよくよくお選びいただきたいと思います。(笑)

石川 辞典を選ぶさいの基準というのはあるんですか。

高田 まあ、なかなか申し上げられませんが、私の関与いたしましたものは間違
いと思います。(笑)

石川 ありがとうございます。

もう一つ質問が来ています。これも少し専門的になるんですけども、「漢字文化と
いうものが本格的に日本に流入してきたのは、中国で言うと唐代、日本で言うと律令
制のころだが、その際、その時代の漢字、漢語、中国語が日本に入ってきたことの歴
史的な意味は何でしょう。つまりなぜほかの時代ではなくて、唐代の文化が入ってき
たのか。それが具体的に今の我々の漢字文化に唐代ならではの影響を与えているとす
ると、それは何なのでしょうか」という、かなり専門的な質問が来ています。唐代の
漢字、あるいは漢語の特色、それが日本に及ぼした影響ということについて、いかが
でしょう。

高田 これは大変重要な問題だと思います。東アジア全域、あるいは東アジアのみ
ならず、中国の周辺国家、周辺の民族国家の勃興というのと、隋唐期の中国の歴史が
大体同じ時代でありまして、日本で大和の朝廷が中国にいわゆる遣隋使を派遣したり
遣唐使を派遣したり、朝鮮半島でも新羅とか高句麗とかが独自の民族国家の形成をお
こなう。今のチベットにも吐蕃王朝ができる。少し遅れてモンゴル人の契丹という国
家ができる。もっと北方で言うと、先ほど私が言いましたウイグルとか突厥とかいう
のがありますけれども、そういったものがみな次々と国家形成をやるようになります
ね。それと中国の文明が最も頂点に達する隋唐時代の長安の文化というのが大体時代
が同じところで、そういった周辺の諸民族が、文化的にすべて長安のほうを見ていた時

代なんですね。そして長安の言語と、その言語を基礎としてつくり上げられたさまざまな文化が、周辺諸民族の学習の対象になっていたことは間違いないと思うんです。

したがって、遣隋使とか遣唐使によってもたらされた当時の長安の文字、言語、文化が大変重要な地位を占めることになったのは、当然のことであろうと思います。

しかしながら、振り返って長安の文化、そしてその基層にあった言語を見ますと、実は、長安の言語は少し田舎の言語なのです。中国の文化の中心は、大体において今の河南省、洛陽あたりの言語、文化が、最も標準的なものとして認識されていたんですが、最も外に向かって勢力を伸ばした王朝の代表格である漢と唐が、ともに西の長安に都を置いていたというのは大変象徴的なんですが、今、ご覧になってわかりますように、あそこはだいぶ中心からはずれた地域にあります。本来的な中国文明からいうと少し田舎の地域です。

そして唐代の長安の言語も、大体都の言語ですから上品な粧いを整えるのですが、基層にある方言的要素がすこぶる強い。ありていに言いますと、なまりが強いんです。そのなまりの非常に強い発音を、日本の遣唐使たちは持って帰ってきた。なまりが強くて、昔の南京のあたりで使われていた呉音の基礎になった発音とはかなり違うものですから、結果として呉音と漢音は対立することになってしまいました。

石川 唐ということで言うと、富谷さんも何か一言おありなのではないですか。

富谷 今、遣唐使という話が出ました。日本と中国との関係というのは、遣唐使、遣唐使と言いますが、もちろん 701 年以前と以後とではちょっと違いますが、本格的に中国との往来が始まった 700 年のはじめから、894 年の廃止までの 200 年間の中で、20 年に 1 回しか行き来がなかったわけですね。ここは押さえておかねばならない大きな問題とおもいます。だから、毎年行ったり来たりしているかというと、決してそうではなかった。むしろ、人間の行き来と



いうのは大変少なかったわけです。20 年に 1 度ですから。特に後半期の遣唐使は僧侶が多くなりまして、そういう意味でも国家間の使節の往来というのは、それほど盛んではなかった。

何が盛んであったのかと言えば、文字でもって書籍が入ってき、そしていくつかの唐の文字で書かれた漢字が入ってきて、それでもって日本は中国の文化を受容したという、これが大きな特徴です。だから、漢字があったからこそ遣唐使は 20 年で、いろんな理由があるのですけれども、それで十分機能を果たした。

したがって、漢字が日本の制度の中にも、例えば今でも使っている刑法の用語の中に唐代の律令の用語があって、そして官職の制度もあるというのは、たしかに日唐関係の重要な要素ですけれども、押さえておかなければならないのは、そこに文字があったからだ。文字でもって交流ができた、ここに大きな重要な問題があると思います。中国と日本との関係で。

石川 そのころの遣唐使というのは、具体的に言うと、日常的に会話するレベルでは中国語をちゃんと話せたと考えていいんですか。

富谷 そうではないと思います。

高田 例えば、空海なんていうのは会話が十分できたと伝えられています。人にもよるのですが、それはたぶん間違いないと思いますね。富谷さんのおっしゃる文字が重要なのだというのは、そのとおりなんですけれども、しかしながら、文字には必ず音がついている。必ず発音があります。特に重要なことは、お寺で行われる勤行の際に唱えるお経の読み方は、唐代には標準的には長安の音で読むということが行われていたようです。これは次第に地域的に変わってくるんですが。

かつて僕は敦煌のものについて調べたことがあるんですが、唐代はずっと長安の方言でちゃんと読んでいた。ところが、唐の力が衰え、敦煌の土着勢力が次第に権力を掌握するようになり、あたかも独立国家のような観を呈するようになりますと、お経も地元の方言で読むようになるんです。そういうことがありますので、日本のお坊さんたちが長安に行って学んできたお経には、必ずやその経文を長安の発音で読んだに違いない。その音を日本に持って帰ってきています。

そして日本のお寺でも長安と同じようにやらなければならないという意識を持っていたのが、まさに空海という人で、朝廷に働きかけて、日本のお経の読みを呉音から漢音に変えようとしてしました。朝廷でもその意見を入れて、漢音を行う命令を何度も出したけれども、お寺さんはなかなか頑固でありまして、なかなか呉音を改めないで今日に至っています。実は空海の真言宗だけが漢音でお経を読んでいるわけです。

石川 今日に至るもそうなんですか。

高田 はい。実は私の家は真言宗なのですが、「一切如来」(イツサイニョライ)という言葉、真言宗では「イッセイジョウライ」と漢音で読んでいます。そういう違いがあります。

石川 ありがとうございます。それでは、長時間にわたりましたが、大体予定の

時刻にもなりましたので、本日のオープン・フォーラムはこれをもって終了いたしたいと思います。

私たちの 21 世紀 COE は今年が最終年度です。したがって、5 年連続で行ってきたオープン・フォーラムも、これをもっていったん打ち切りということになるかと思えます。ただ、漢字文化を将来に向けて継承・発展していくという、人文科学研究所が取り組んでいるこのテーマは、仮にこのプロジェクトがいったん休止しても決して消えるものではありませんので、また折を見て、このような問題を引き続き討議していきたいと考えております。その際はよろしくご理解、ご支援のほどお願いいたします。

本日は長時間にわたりまして、講演の方々、それから皆さんどうもありがとうございました。

(拍 手)

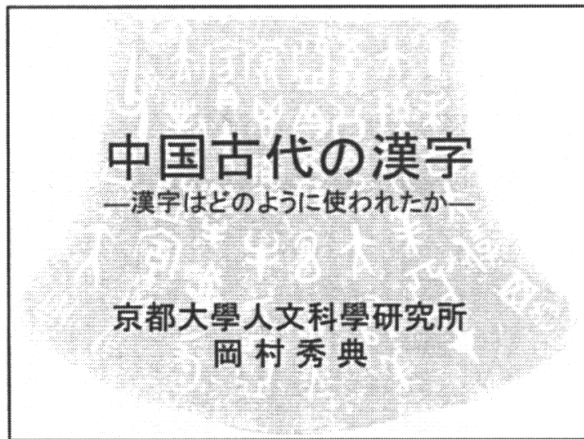


資 料 編

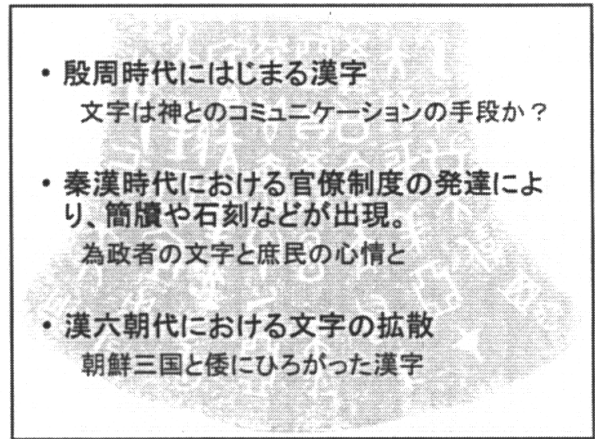
岡村報告（資料 1～30）……………58～62

富谷報告……………63～66

高田報告（地図、図版）……………67～69



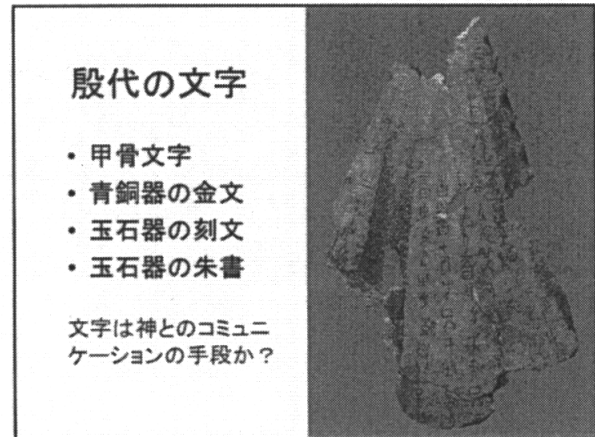
1



2



3



4



5



6

漢字文化の継承と発展

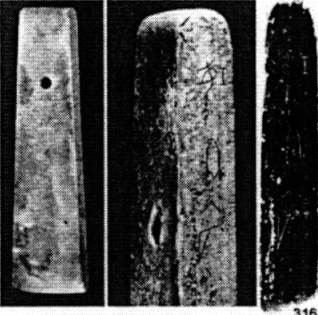
殷墟婦好墓の石磬に刻まれた文字

婦好は武丁の夫人

孔には垂下の紐掛け痕

妊冉入石

「妊冉」は族名、
「入」は貢納の意
味で、「石」は字
形から石磬を象
る(郭沫若)。



316

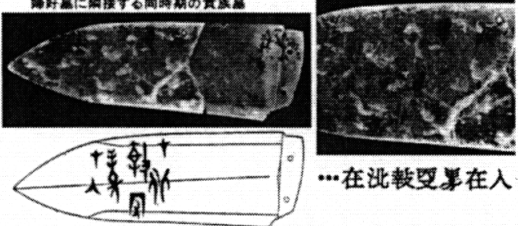
7

殷墟小屯18号墓の玉戈の朱書文字

婦好墓に隣接する同時期の貴族墓

…在洮執翌事在人

「洮北」は殷墟卜辞にもみえる方国の名で、殷と敵対していた。
「執」は捕らえる意か。報告者は捕獲品に朱書したと推測する。
記念するための文字？

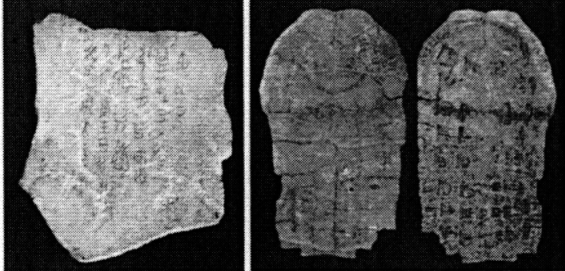


8

周原甲骨

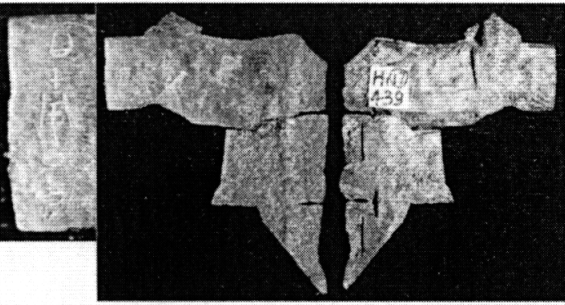
殷末期に文字が周族にひろがった

由文正
血社三豚三
反母其彝
成唐其祭
乙宗貞王其即祭
癸巳彝文武帝



9

周公廟遺跡の卜甲



10

西周燕国の卜甲

- ・北京市琉璃河遺址
- ・西周前期の卜甲
- ・「成周」「用貞」など

周公廟と同じような短文

銘文をもつ青銅器
は都でつくられたが、
卜甲文は現地の封
建諸侯が刻んだ。

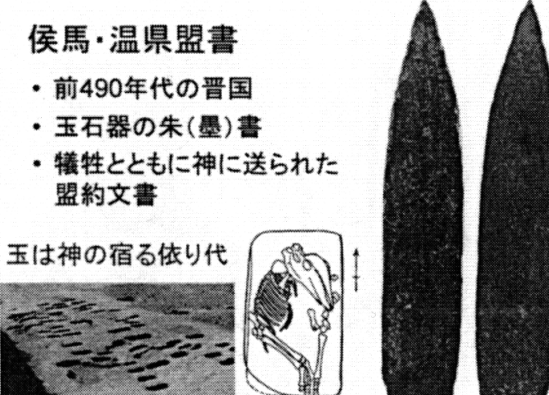


11

侯馬・温県盟書

- ・前490年代の晋国
- ・玉石器の朱(墨)書
- ・犠牲とともに神に送られた
盟約文書

玉は神の宿る依り代



12

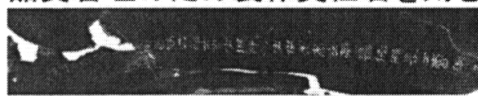
中国古代の漢字

秦漢時代の文字

- 官僚制度における文字使用のひろがり
官営工房における製作責任者の銘記
宮廷における管理責任者の銘記
- 世情を反映する文字のひろがり
韻文のひろがり ex. 馬王堆帛書『老子』、鎮墓文
民間歌謡を集めた楽府と鏡銘
- 後漢代に市場向けの宣伝句が出現
武器など一部の製品には官製の銘記

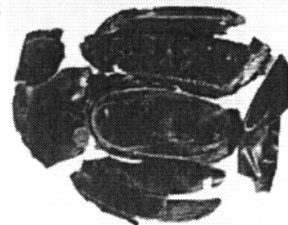
13

品質管理のため製作責任者を刻む



楽浪漢墓出土漆耳杯

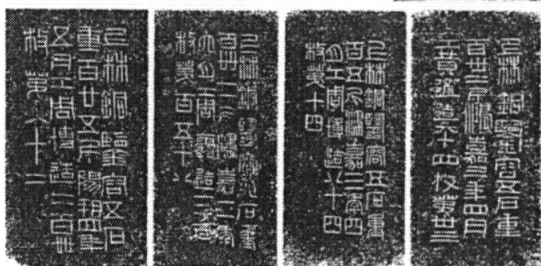
- 年号
- 工官名
- 器名
- 容量
- 工人名
- 官人名



14

上林宮作器 製作者の管理記録

前24～前18年までの7年間に計1258器の鑑を製作。
周博のつくった1と3は字形が異なる。
3と4は同年月の作器だが字形が異なる。



1 周博 (21 B.C.) 2 周博 (19 B.C.) 3 周博 (18 B.C.) 4 黄通 (18 B.C.)

15

管理責任を刻む



中山内府銅鏡一、容
二斗、重六斤十兩、第
八十三、卅四年四月、
郎中定市河東



中山国の郎中の定(人
名)が前121年4月に山
西省の市場でこの銅鏡
を購入した。第八十三
は、備品番号。

16

金銀錯鳥篆文鍾

満城1号漢墓出土
前113年没の中山王勝

(蓋) 有言三 南金銀 為茲養 錦書之
(頸) 畫圖四 設 備草成 登
(肩) 盛兄盛味 於心佳都 攝於
(腹) 口味 充閑血狀 延壽却病 萬年有余



下腹部の銘文



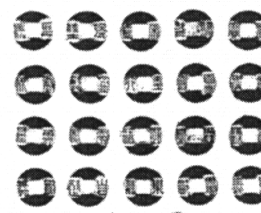
17

酒令錢

満城2号漢墓出土
中山王勝の夫人



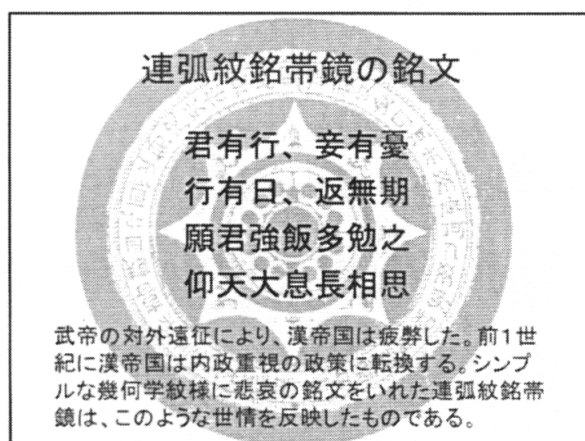
聖主佐 得佳士
常母苛 驕次己
府庫實 五穀成
金錢抱 珠玉行
貴富壽 壽母病
萬民番 天下安
起行酒 樂無憂
飲酒歌 飲其右
自飲止 樂乃始
畏妻鄙 壽无毒



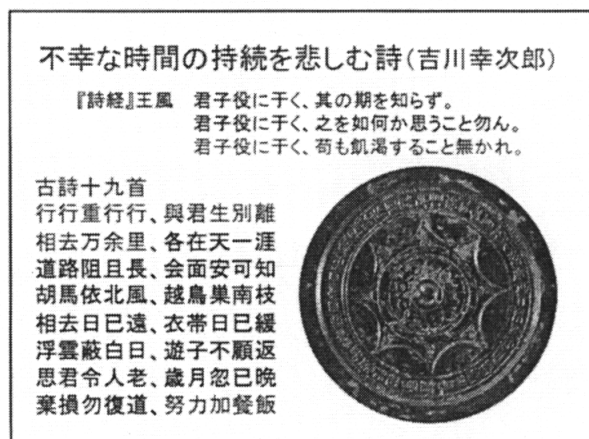
18



19



20



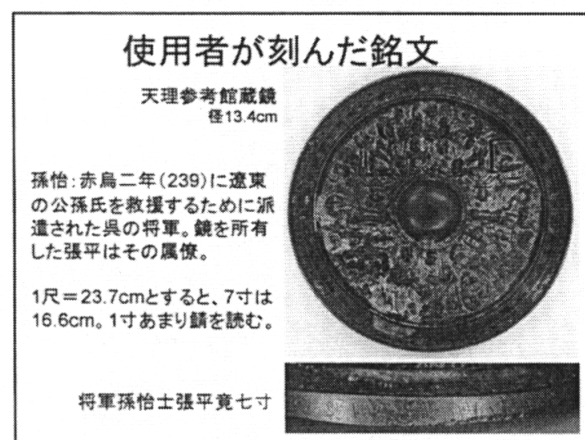
21



22



23

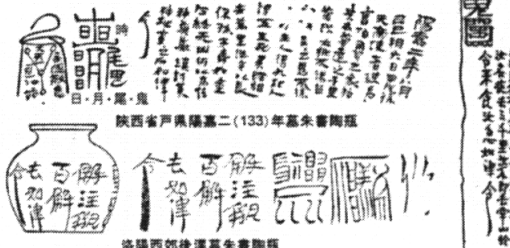


24

漢字文化の継承と発展

呪術文字(符)の出現
王育成「東漢道符釈例」『考古学報』1991-1

いくつかの漢字を組みあわせた呪符



陝西省戸県陽基二(133)年墓朱書陶瓶

洛陽西郊後漢墓朱書陶瓶

鎮墓文は脚韻をふむ

江蘇省高郵邵家溝遺址

25

漢字の拡散

- 前2世紀の南越国での漢字使用
広範な漢字の使用。
しかし、同時期の朝鮮国には証拠がない。
- 楽浪郡設置(前108年)後の朝鮮原三国と倭
慶尚南道茶戸里1号墓から筆と小刀。
漢字の使用は4世紀まで証拠がない。

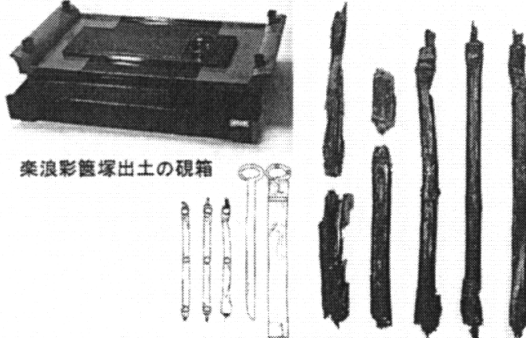
26

南越王墓(前122年ごろ)



封泥

27



楽浪郡楽浪塚出土の硯箱

東夷における刀筆の吏 韓国茶戸里1号墓(前1世紀)

28

前漢文物の東伝



金海良洞里322号墓
西口宮廟尊一斗
并重十七斤七閏七

Tillya-tepe, Afghanistan

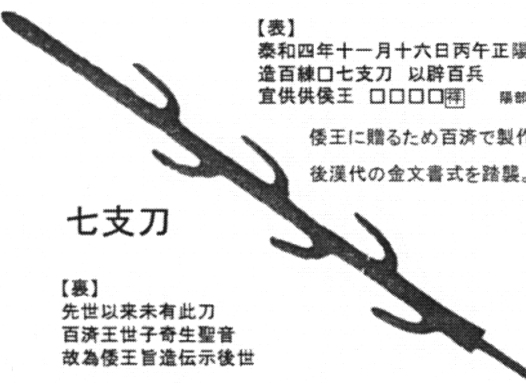
福岡県立岩10号壙棺墓

29

七支刀

【表】
泰和四年十一月十六日丙午正陽
造百練口七支刀 以辟百兵
宜供侯王 口口口口 陽部

倭王に贈るため百濟で製作。
後漢代の金文書式を踏襲。



【裏】
先世以來未有此刀
百濟王世子奇生聖音
故為倭王官造伝示後世

30

中国古代の漢字

(1)

建書更遷序免給事滿者四八三聯
 建長五年一月甲辰朔丙午居延
 令 承富告尉謂獨移甲
 張惟官驢書後事如建个

EPT 22. 56 A

(2)

建書更遷序免給事滿者四八三聯
 建長五年一月甲辰朔丙午居延
 令 承富告尉謂獨移甲
 張惟官驢書後事如建个

EPT 22. 58 A

(3)

富貴昌宜侯王富貴昌宜侯王

EPT 59. 340 A

(4)

富貴昌宜侯王富貴昌宜侯王

EPT 53. 66 B

(8)

所
 少
 能
 力
 之
 有
 義
 道
 來
 之
 平

(7)

一
 人
 之
 學

(6)

是
 舍
 人
 去
 日
 時
 傳
 舍
 人
 行

(5)

三
 人
 之
 學

急就章	漢黃門令史游撰 每標章首以字數爲斷者蓋取其程課學僅簡牘爲便也是以前之卒章或與後句相聯
急就章	唐秘書監顏師古註 淳元帝時人也見漢書文志黃門令屬少府
急就奇觚與衆異	觚者學言之體或以記事創木爲之蓋簡屬也孔子貳觚即此之謂其形或六面或八面皆可言觚觚者棱也以有棱角故謂之觚言學急當就此奇好之觚其中深博與衆書有異也晉國兩都隸曰上觚校而校全爵今俗猶呼小兒學書蘭崗本觚章蓋古之道語也
羅列諸物名姓字	言此衆章列敘萬物之名及人姓字
分別部居不雜前	前後之分以類相從櫃匣分不相間錯也
用日約少誠快意	以其詳悉並錄備不費功日而心意開了故云快意也攷學記曰師逸而功倍勉力務之必有捷效

	故堂問科罪不同	
閭里鄉鄰系族李論		
里門曰閭里者本英所居之里也里屬於鄉 鄉統於縣鄉謂催逮之也時法也里鄉及縣皆連鄉 依催逮而使早蘇則 塞法而論決也		
鬼薪白粲鉗鋕免		
此謂輕罰非重罪名也鬼薪立取薪柴以供 祭祀鬼神也白粲主擇未取精白粲案然者供 也以鐵錯頭曰鉗鎧 足曰鈇斷數曰髡		
不肯謹慎自令然		

已	又	莊	昭	之
諭	屬	詔	作	谿谷山
諭	屬	言	既	入其處也
詔	書	處	罰	令其輸作也
山	谿	無	所	輸作也
出	通	川	曰	谿
谿	曰	谷	配	於谿
谷	一	谿	谷	及山
水	注	川	曰	谿
注	之	谿	也	
振	救	起	居	課後先
振	吹	戰	也	
食	時	也	言	督作之
之	節	度	又	授其程
之	倡	欲	相	號令
者	則	吹	指	為節
之	之	之	之	之

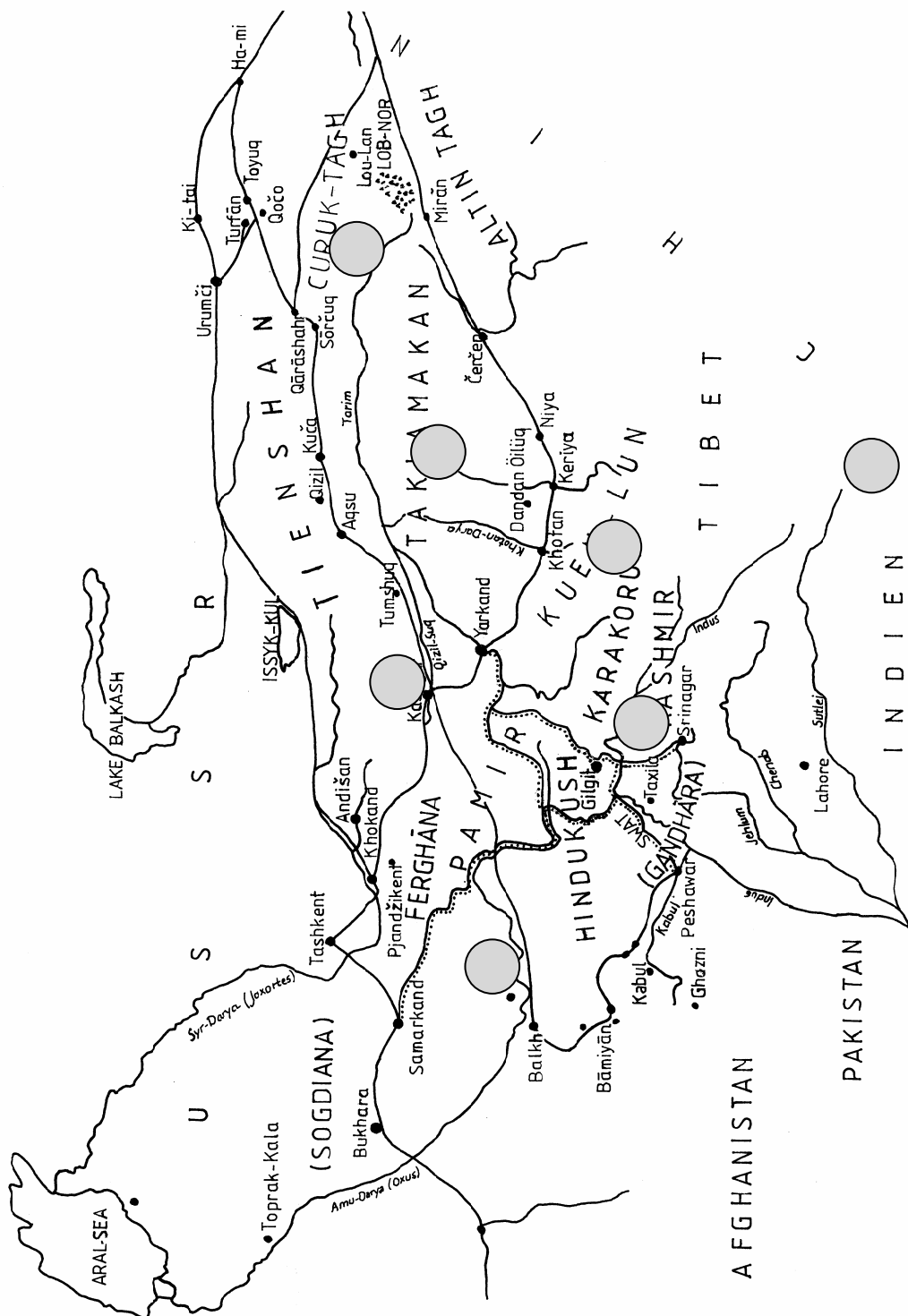
斫伐材木斫採根	斫伐也伐取也材謂之木採也林也
犯禍事老置對曹	犯也禍犯法而致禍也事危其事傾危也既被驗問則置立封辭於曹府也
誨訖首匿愁勿聊	誨訖巧黜不實也首匿為贗首而藏匿罪人也勿聊無聊賴也
縛束脫漏亡命流	亡命者名也脫被縛束忽脫亡其名籍而流送也

『千字文』

(真草千字文勅員外散騎侍郎周興嗣次韻)

天地玄黃，宇宙洪荒。日月盈昃，辰宿列張。寒來暑往，秋收冬藏。閏餘成歲，律呂調陽。雲騰致雨，露結為霜。金生麗水，玉出崑崗。劍號巨闕，珠稱夜光。海鹹河淡，鱗潛羽翔。龍師火帝，鳥官人皇。始制文字，乃服衣裳。推位讓國，有虞陶唐。垂拱平章，坐朝問道。臣伏戎羌，弔民伐罪，周發殷湯。受脤黎首，鳴鳳在樹。率賓歸王，化被草木。賴及萬方，白駒食場。蓋此身髮，豈敢毀傷。四大五常，恭惟鞠養。知過必改，得能莫忘。男效才良，靡恃己長。信使可覆，器欲難量。墨悲絲染，詩讚羔羊。景行維賢，剋念作聖。德建名立，形端表正。空谷傳聲，虛堂習聽。禍因惡積，福因惡積。

福緣善慶，資父事君。忠則盡命，似蘭斯馨。淵澄取暎，篇初誠美。藉甚無竟，存以甘棠。禮別尊卑，外受傳訓。猶子比兒，交友投分。造次弗離，性靜情逸。逐物意移，都邑華夏。浮渭據涇，圖寫禽獸。甲帳對楹，升階納陛。左達(承明)弁轉疑星，尺璧非寶。日嚴與敬，臨深履薄。如松之盛，容止若思。慎終宜令，學優登仕。去而益詠，上和下睦。入奉母儀，孔懷兄弟。切磨箴規，節義廉退。心動神疲，堅持雅操。東西二京，宮殿盤鬱。畫綵仙靈，肆筵設席。并轉疑星，右通廣內。寸陰是競，幸當竭力。夙興溫清，川流不息。言辭安定，榮業所基。攝職從政，樂殊貴賤。夫唱婦隨，諸姑伯叔。同氣連枝，仁慈隱惻。順沛匪虧，守真志滿。好爵自縻，背芒面洛。樓觀飛驚，丙舍傍啓。鼓瑟吹笙，右通廣內。



シルクロードと漢字文化

高田時雄

○漢字文化の東西

日本の王朝時代の文化の精華は、遣唐使が長安からもたらしたもので、ごく大雑把に言って唐代の中國文化（漢字文化）をほぼそのままに移入したものであった。しかし一方で、それはシルクロード沿線諸民族の文化を内に含んだ国際色豊かなものであった。翻って漢字そのものについていえば、朝鮮半島や日本に漢字が傳播したのと同様に、西方にも漢字は傳わっている。それがどの程度まで深く根を下ろしていたかを考えることは、興味深いものがある。

○ムグ山文書

1933年、タジキスタンのムグ山（サマルカンドの東方200kmにあるソグド城砦址）から發見された漢文文書（三點）。うち一點には神龍二年（706）の紀年がある。交城守捉、大斗守捉などの名稱から涼州管内のものであることが分かる。ソグド人により故紙として輸入されたものである。

○クチャ發見漢文文書

クチャは西域北道最大のオアシス都市國家で、唐は顯慶三年（658）高昌からここに安西都護府を移した。クチャからは唐代のクチャ語文書と漢文文書が發見されている。唐代にはクチャ語も相變わず現地住民によって使用されたが、官用文書は漢文で書かれたらしく、契約文書などもクチャ人とおぼしい名前が頻見する。これらの文書には「開」元、天寶、上元、大曆、建中などの年號の見えることから、八世紀のものと推測できる。（圖一）

○コータン發見漢文文書

スタインやヘディン、ペトロフスキーなどが獲得したコータン出土の漢文文書は、クチャの場合とほぼ同じく、開元十八年（730）以降貞元年間まで、ほぼ八世紀末か九世紀初めまでのものである。その中には漢＝コータン二言語寫本が間々見られ、二言語で同一の内容が記録されている。（圖二）

クチャやコータンでは書記の傳統が確立しており、唐の政治的支配下においても、現地住民が漢字を採用することはなかったように見受けられる。少なくとも漢文文書と並んで、一定程度、現地語の文書が必要とされた。

○トルファン（吐魯番）の場合

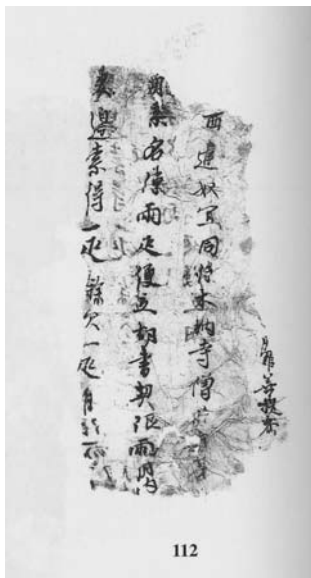
トルファン（吐魯番）の場合は事情が大きく異なっている。トルファンからは上に見たクチャやコータンと同時代の文書が大量に發見されているが、並行して現地語の文書が用いられた痕跡は（筆者の知る限り）存在しない。その理由は二つ考えられる。一つはトルファンの現地住民にはクチャやコータンに於けるような強固な書記の傳統が缺如していたこと。第二はトルファンには前漢元帝の初元元年（B.C.48）に戊己校尉が置かれて以來、高昌壁、高昌壘、高昌郡の時代を通じて、中原や五涼王朝の支配下にあり、さらに麴氏高昌國時代には獨立した漢人王朝であった（貞觀十四年（640）、唐に滅ぶ）。その期間、一貫して漢字文化の大きな影響下にあった上、人口面でも漢人の數が現地住民よりもずっと多かったとされる。

その後、九世紀になるとモンゴリアの本據を逐われたウイグル族がここに根據地を移し、いわゆる高昌ウイグル王國（西ウイグル國）を建設し、十三世紀のモンゴルの征服に至るまで、特色ある仏教文化を開花させた。それを支えた大きな要素の一つに漢字文化がある。

ウイグル國では、日本の漢音や呉音のような本獨得の漢字音と同様に、ウイグル獨得の字音を成立させた。

すなわちウイグル人たちは漢字をウイグル独自の傳承音で讀むようになっていた。この字音は河西地方の音を基礎としつつ、ウイグル語の音韻體系に適應したもので、聲調の區別をもたず、頭子音や韻母も非常に簡略化されたものであった。これらの體系は漢字による音注資料や、ウイグル文字で漢字を寫した資料などから歸納できる。(圖三)

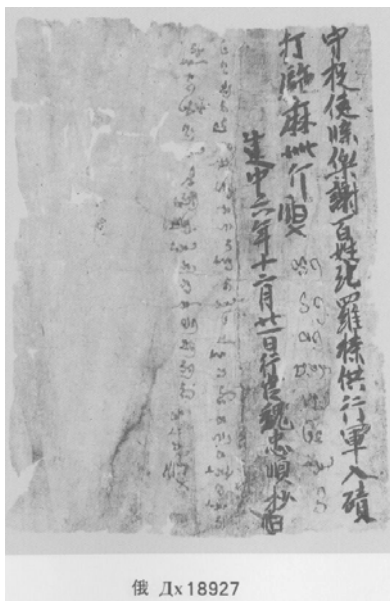
ウイグル國では、日本の假名漢字交じり文と似通ったウイグル字漢字交じり文も行われ、また漢字の讀み方には訓讀と音讀の兩者があり、適宜二種を用いた。さらに兩者を併用する日本の文選讀みのような讀み方も存在した。例えば《千字文》だと、日本では「天地玄黄」を「テンチのあめつちは、ゲンコウとくろく、きなり」と讀むが、ウイグルの《千字文》ではこんな風になる。例えば「菜重芥薑」では、まず(ウイグル字音で)音讀みして「sai čuŋqai ko」といい、次いで訓讀みを用い「qavla-lar-ta: aŋir-lir boldi qaytsi yig siŋir bilän」(野菜では、芥子とショウガが重要だ)とする。(庄垣内正弘による)(圖四)



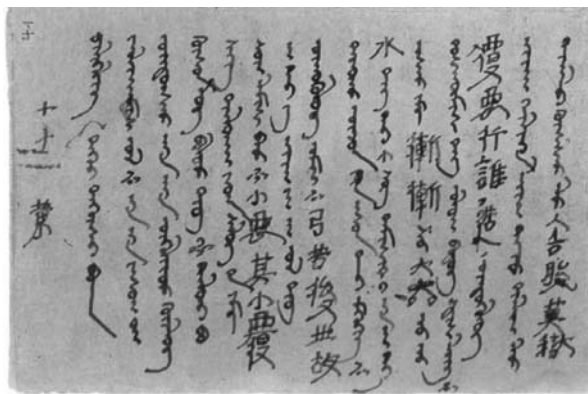
圖一



圖三



圖二



圖四

【 あとがき 】

本報告書は、2008 年 2 月 10 日（日）に京都新聞文化ホールで行われたオープン・フォーラム“ 漢字文化の今 5 ”での講演、およびパネル・ディスカッションを当日の速記録にもとづいて編集したものである。

このオープン・フォーラムは、21 世紀 COE のさまざまなプロジェクトが、ともすれば極先端にかたよりがちなことに鑑み、「漢字文化の全き継承と発展のために」という本課題を広く市民諸氏と共有することを目指して、企画されてきたものである。これまで、4 回にわたってフォーラムを開催し、毎回百人を超える参加者を得るなど、好評を博してきた。これら 4 回のオープン・フォーラムでの報告・討議の様子は、それぞれの会の後に刊行した報告書（PDF 版は <http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/results.html> で閲覧可能）に詳しいので、ご関心の向きはそちらをご覧ください。

4 年連続で開催したオープン・フォーラムが、いずれも多くの方の市民の参加をえる盛況であったため、我々は、「このような催しを継続して行ってほしい」という参加者からの多くの声に励まされ、第 5 回のオープン・フォーラムを企画することとなった。企画にあたっては、今回の会が 21 世紀 COE プロジェクトの最終年度のものであることを念頭に置き、本拠点の専任スタッフである考古学、言語学、歴史学、文学の専門家が、漢字の原初期の姿から説き起こし、漢字を通して初めて理解される東アジアの文化の奥深さを、最新の学術的知見から縦横に論じることにした。実は、本プロジェクトは昨年 12 月に、専門家を対象とした国際シンポジウム「漢字文化三千年」を京都大学で開催したのだが、一般の方々にもわかりやすい形でそこでの成果を提供できないかと考えたのが、今回の出発点であった。その上で、これら漢字文化が将来にわたって如何に継承されるべきか、そして日本が漢字文化の発展に果たしうる貢献は何なのかを、参会者ととともに討議せんとしたのである。

フォーラムの一方の主催者である京都新聞の協力のもと、今回も 150 人を越える方々が会場にお越し下さった。また、講演者諸氏の周到な準備のおかげで、講演・討議も実に中味の濃いものになったと言ってよいだろう。その具体的な様子は、翌日の『京都新聞』でも報道されている通りである。

本記録は、当日の速記録をそれぞれの講演者、パネラーに送り、その校正を経て編集したものである。基本的には当日の講演、発言のままであるが、口語的な表現を書き言葉にあらためたり、口頭発言ゆえの仔細な誤りを訂正したり、あるいは当日の配布物（あるいは映写物）を講演に繰り込んだり、といった加工をほどこしてある。

（編集責任者 石川 禎浩）